
おもしろ！ 霊界物語 -3



霊界物語は大変難しい教え（読み物）ですが、一面滑稽諧謔な駄洒落の多い、大声で笑ったり、クスクスと笑いながら読んで行けます。そして世の中の様々な面を教えてください。この表題を「おもしろ！ 霊界物語」としたのは清少納言の枕草子に「いとおかし（とっても趣きがある）」とあるように、教えの多様性を“おもしろ”としたものです。

目 次

3-1、聖師様の著作に見るアインシュタイン	
《2と3の違い、相対性原理と霊力体》	・・・2
霊界物語に出てくるアインシュタイン	・・・2
二と三の違い、相対性原理と霊力体	・・・4
自湧的にして自在な智識	・・・4
3-2、未来の資源エネルギーと気候	・・・6
竜宮の御宝	・・・8
温暖化はミロクの世への一歩	・・・11
3-3、宇宙創造・神示の宇宙とビックバン理論	・・・12
古事記、日本書紀による天地開闢！	・・・12
科学では	・・・12
神様はどう語られているのでしょうか！	・・・13
宇宙創造の意義	・・・16
参考：過去の宇宙論（ウイキペディアより）	・・・17
インフレーション理論と初期ゆらぎ	・・・18
3-4、霊界物語に出てくる文学作品	・・・20
第十二巻 第十章「深夜の琴」に	・・・20
第十八巻 第一章「春野の旅」には	・・・21
第二五巻 総説では	・・・22
第五六巻 第三章「仇花」から	・・・23
第二五巻 第二章「与太理縮」から	・・・29

聖師様の著作に見るアインシュタイン

《2と3の違い、相対性原理と霊力体》

霊界物語に出てくるアインシュタイン

霊界物語の中にアインシュタインという言葉が出てきます。勿論あの有名な物理学者アインシュタインのことです。

霊界物語 第十卷「総説歌」(抜粋)

三五教の御諭しは 最後の光明良めなり ナザレの聖者キリストは 神を楯としパンを説き
 マルクス麵麩もて神を説く 月照彦の靈の裔 印度の釈迦の方便*は そのまま真如実相*か 般
 若心経を宗*とする 竜樹菩薩*の空々は これまた真理か実相か 物理に根ざせる哲学者 アイン
スタインの唱へたる 相対性の原理説は 絶対真理の究明か 宗教学者の主張せる 死神死仏を葬
 りて 最後の光は墓を蹴り 蘇へらすは五六七神 胎蔵されし天地の 根本改造の大光明
 尽十方無碍光如来なり 菩提樹の下聖者をば 起たしめたるは暁の 天明閃く太白星《金星》 東
 の方の博士をば 馬槽に導く怪星も 否定*の闇を打破る 大統一の太陽も 舍身供養の炎まで
 残らず五六七の顕現ぞ 大

正十一年二月廿七日 旧二月一日

【方便】： 教え導く巧みな手段。

【真如】： 普遍的な真理。 【実相】： 現象界の真実のすがた。

【宗】： 経典の根本思想。

【竜樹菩薩】： バラモン出身の僧。空の思想を説いた。

【尽十方】： あらゆる場所・方角。

【無碍光】： 何物にも妨げられない仏の発する智慧や慈悲の光。特に、十二光の一で、阿弥陀如来の光明

【否定】： ヘーゲル弁証法の根本法則の一、否定の否定を指すのか？。すべての事物は内在する矛盾によって自己を否定し、出現した他者と対立するが、この対立はさらに否定されて、より高次の段階へと発展する。矛盾の超克によるこの2番目の否定のこと。

《 》内は筆者の入れた注

霊界物語 第25卷第二章「与太理縮」

蜈蚣姫が「・・・体を以て体に対し、霊を以て霊に対し、力を以て力に対するは天地の道理ぢやありませぬか。アインシュタインの相対性原理の説明だつて、さうぢやないか。・・・」

(大正十一年七月七日 旧閏五・一三 北村隆光録)

霊界物語 第四六卷 序文

現代の天文地文学、物理学、化学、幾何学、機械学、解析学、心理学、哲学、歴史、文学、批評、言語等、所謂科学の眼から見れば、この物語は実に文厘の価値もなきものと見えるでせう。十悪無一善の凡夫心から観察する時は、不道理と矛盾と撞着で充満してゐるでせう。ベルグソン、オイケンの流行で、生命や生活又は生だのと色々論議され、近頃はまたプロレタリアにブルジョアに文化生活、相対性原理説など頻りに主唱さるる世の中だから、現代人の耳に入りさうなことはないと思ふ。然しながら、権花一朝の夢にも等しき現代の流行書『死線を越えて』とか『新約』『旧約』『復活』『出家と其弟子』『懺悔の生活』等の如く、現代人、而も二三年未満の愛読者を求むるのではない。幾千万年の後までも言葉の光を輝かすのが真の目的なのである。故

に現代人に容れられむことを望むのでない、唯々一人なりとも多く読んで神界の真相を悟り、大にしては治国平天下のために、小にしては修身齊家の基本となすに致らば、口述者にとつて望外の喜びなるのみならず、世道人心に裨益する所大なるべきを思うて止まぬのみであります。

大正十一年十二月十五日 王仁識

【文厘】： 文はお金または靴のサイズの単位。厘は尺貫法で、長さや目方を表す単位。貨幣の単位。これらの最小単位

【撞着】： 矛盾に同じ 【槿花一朝の夢】： 栄華のはかないことを、ムクゲの花にたとえていう。

【裨益】： おぎない益すること。役に立つこと。

霊界物語 第四七巻第一章 アーク灯

『エツヘツへ、どうやら俺も体内国の暴動が鎮定したと見えて、凡ての諸官能が活動中止と……見えるワイ。シ、舌迄引きつつて来さうだ。キヨキヨ恐怖心が大変に巾を利かしよつた……やうだ』

『ア、苦しい、ド、何うしたら、此談判はカ、解決がつくだらうかな』

『アインシュタインの相対性原理説でも応用して、うまく此場を切りぬけ……るのだな』

(大正十二年一月八日 旧十一・十一・二二 松村真澄録)

以上全巻を通してこの四箇所があります。

出口王仁三郎著作集第3巻「真の宗教・中道を行」には

こういう科学万能の世の中、宗教のほとんど破産した世の中に、宗教も生かし科学も生かし、あらゆる哲学に生命を与えるところの霊力体の三大原則の教えを樹てたこの大本は、今までどんな智者、学者も、これを唱えたことのない天啓の教理であります。五大州にどんな学者があつても、どんな博士があつても、この霊力体の三大原理にたいしてはなんともいうことができないのであります。アインシュタインは相対性の原理説を唱えているが、あれは二つであつてこちらは三つである。向こうは霊と体と、あるいは東と西と、男と女というようなものであるが、男と女のなかに一つの妙な力があつて子ができる——こういうところまでは説いていないのであります。

霊力体この三つの旗を押したてて、この闇黒の世の中に進んだならばきつと明らかな世の中となる。どんな敵もこれに服すべきはずであります。非常に立派な正宗の名刀をめいめいに大本の信者は授かつていますが、これを使うことを知らないがために、既成宗教家および無宗教者からばかにされ、反対をうけているのであります。ほんとうに教えに徹底し、ほんとうに宣伝ができたならば、いかなるものも、これに反抗するはずはないのであります。 (「瑞祥新聞」 昭和9年8月1日)

さて、聖師様は相対性理論は2で、大本の教えは3であると仰っています。相対性理論は相対=2です。一方から他方をみた時の運動状態です。例えば新幹線に乗って駅(仮に上り線)に停車しているとき、下り線を150kmで電車が通過していった場合、下り列車は150kmで近づき、去って行ったと感ずります。また、走行中上りと下りの列車がすれちがう場合、上り電車が200kmで、下り電車が150kmであれば、電車に乗っている人から見るとお互いが近づいて遠ざかる速さは350kmとなります。この様にお互い(2元)の関係がうまれます。

相対性理論では「時間は相対的である。人は皆、その人個人の時間を持っている」それを証明したのが、この「相対性理論」なのです。つまり、相対性理論とは、一言で言うと、「時間とは一定ではなく、《相手によって》変化する」と言う理論なのです。(インターネットより) 《 》内は筆者が入れた。

二と三の違い、相対性原理と霊力体

聖師様は人は頭（現れている）の世界に居り、幽霊は人間から見れば幽（隠れている）の世界の存在であるとおっしゃっています。二人の人間がいて一方が幽霊を見、他方が見なかった場合、幽霊を見た人にとって幽霊は頭の存在となり、一方見なかった人にとっては幽霊はあくまでも幽の存在です。これも相対の世界です。神様はこの宇宙の成り立ちは陰陽（言葉を換えれば霊体、善悪、男女等）の相反する二元から成り立っていると示されています。さらに、大本の根本的教えは霊力体の三元の教えであり、この霊体、陰陽の二元の結合によって力が生まれ森羅万象が創り出されたと説かれています。しかもその力は陰陽二元の微妙な塩梅によって様々な形となって現れてきます。身近な例で言えば、「男と女のなかに一つの妙な力があつて子ができ」ますが、同じ両親から生まれる子に男女の区別があつたり、同じ兄弟姉妹であってもその容姿や性格はそれぞれに違っています。宇宙万有総てこの陰陽の微妙な加減から生まれた産物なのです。ここに今まで誰も説かなかった2と3の違いがあるのです。

これまでの歴史に残る最初の地動説は、紀元前500年頃です。一方プトレマイオス（83年頃 - 168年頃）が確立した天動説が発展しキリスト教と結びつき中世では天動説が主流となりました。天動説か地動説かも見方によっては相対理論です。どちらの側に立つかによって見方が違ってきます。どちらにしても宇宙の中に身を置いて見えています。聖師様のように宇宙の外に立って見たとき天動説でも地動説でもなく、地球も太陽もただ傾斜運動を行っているだけという自動傾斜運動説（霊界物語第四巻「神示の宇宙」参照）になるのです。

自湧的にして自在な智識

アインシュタインの特殊相対性理論が1905年に発表さ、一般相対性理論は1916(大正5年)に発表されました。スウェーデン科学アカデミーがアインシュタインに1921年度ノーベル物理学賞（光電効果の法則等について。相対性理論についてはない）を授与することを発表し、1923年(大正12年)にノーベル賞を受賞しています。そして1922年(大正11年10月17日)に日本を訪問しています。上記霊界物語は第10巻「総説歌」が大正11年2月27日の御口述ですから日本訪問の前に物語に登場させています。

霊界物語 第六四巻上 第二章「宣伝使」に

『救世主が最早再誕されたと仰有るのですか。大聖主メシヤたる可き神格者には九箇の大資格が必要ですが、左様な神格者は容易に得られますまい。先づ第一に、

- 一、大聖主は世界人類の教育者たること
- 二、其教義は世界的にして人類に教化をもたらすもの成ること
- 三、其智識は後天的のものに非ずして自湧的にして自在なる可きこと
- 四、彼は所在賢哲の疑問に明答を与へ、世界のあらゆる問題を決定し、而して迫害と苦痛を甘受す可きものなること。 等・・・・・・・・

という文章があります。一、二は物語を読めば納得が行きます。しかし、この三番の「その智識は後天的なものではなく自ずと湧き出て、しかも思いのままであること」の証しをこう語っています。

『御尤もです。第三の資格に合致した点の御説明を願ひます』

『我聖主ウヅンバラ・チャンダー様は、小学校へ通ふこと僅かに三年で、しかも世界智識の宝庫とまで言はるる程の智識を有し玉ひ、天地万有一切の物に対して深遠なる理解を有し、三世を洞観し、天界地獄の由来より過去現在未来に涉りて、如何なる質問にも尠しも遅滞せず即答を与へ、且つ苦集滅道を説き道法礼節を開示し

、泉の如く^{こんこん}涸々として湧出するその智識には、如何なる反対者と^{いへど}雖も感服して居りますよ。天文に地文に、政治に宗教に、道徳に芸術に、医学に曆法に、詩歌に文筆に演説等、何れも自湧的に無限に其真を顕はし得ると云ふ稀代の神人であります。幼時より八ツ耳、神童又は地獄耳などの仇名を取つて居た方ですからなア。今も猶、神政成就の神策に関する神秘的^{すべ}神示を昼夜執筆されつつあります。世界各国の国語と雖も、未だ一度も学んだ事の無いお方が、凡ての国の言語が習はずして口から出て来るのですから、吾々はどうしても凡人だとは思ひませぬ。何人も聖主を指して生神だ生宮だと崇めて居りますよ。所謂貴師の仰せに成つた

「その智識は後天的のものに非ずして、自湧的なる可きこと」に合致するぢやありませんか？

『へー、何と不思議な方ですな。それこそ真正の大聖主メシヤですな』 【64上/2 宣伝使】

三番に対して聖師様が救世主だとする、その証しとでも言うべきものが他にも有つたらと色々気をつけてきたのですが。このアインシュタインの部分^{すべ}がまさに「自湧的にして自在」ではないかと考えるのです。

相対性原理は現在の我々にとっても決して易しい事柄ではありません。ましてや大正11年の時点ではその理論を理解している人はよほどの専門家でなければいなかっただしょう。仮に聖師様の廻りに誰かその知識を持っていて聖師様に説明したとしても、そう簡単に理解出来るものではないと思います。

大正11年（1922年）3月10日、改造社の招致でマーガレット・サンガーが来日していますが、このサンガー夫人〔アメリカ合衆国の産児制限（受胎調節）活動家〕の思想は国策に反するとして当時の内務省から一般への講演が禁止されています。霊界物語には第20巻第3章「山河不尽」（大正11・5・12 旧4・16 北村隆光録）に出てきます。この産児制限は神の教えに反すると共に当時の社会問題として物語に取り上げたものでしょう。しかし第10巻総説歌の「アインシュタインの唱へたる 相対性の原理説は 絶対真理の究明か」や第25巻第2章「与太理縮」の「アインシュタインの相対性原理の説明だつて、さうぢやないか」などは単なる時事的記事として物語に載せたとはとても考えられません。その内容を自湧的に理解しているの結果だと思ひます

。

未来の資源エネルギーと気候

五六七の世を迎えるにあたって、神様は立直しのために竜宮の宝を使うと伊都能売神諭に示されています。現在の我々は東日本大震災以降、多くの人が原子力エネルギーが如何に危ういものかをようやく認識するようになりました。また地球温暖化は化石燃料がそれに大きく影響しているといわれていますし、そう遠くない将来には枯渇するともいわれています。再生可能エネルギーはやっとその緒に就いたばかりでおぼつかない感があります。これらの問題を物語や聖師様のお言葉から少し考えていこうと思います。

未来のエネルギー資源は

伊都能売神諭 大正8(1919)年8月2日(P37)に以下の文章があります。

『是から^{さき}後になると露国の悪神^よさえ能う掘り出さなんだ竜宮^{みたら}の御宝を、今度は英米西^{えべすだいこく}大国が自由に致す仕組を致して居るが、此の宝は今度の二度目の世の立替のかみの宝で、昔から隠^{かく}して有りたので在るから、体主^あ霊^く従^くの国魂^{くにたま}には自由には致させんぞよ。金銀銅鉄水鉛石炭木材食物は、何程でも竜宮の乙姫が守護致して日出のかみに渡してあるから、肝腎の時には掘上げて、三千世界の立直しに使ふて、五六七の神代を建るぞよ。寒い国では在れど、今まで人民の自由に致さぬ様に、態^{わざ}とに寒い国の広い所^{こしらへ}に創造て蓄へてありたので有るぞよ。日本の人民も外国の人民も大変な目的を立て、我の自由に致さうと思ふて一生懸命に骨を折りで居るなれど、かみの宝に人民が勝手に手を掛けたら大騒動が起るぞよ。是も時節であるから、外国の身魂がモウ手を出し掛けて居るなれど、九分九厘まで行つた所で手の掌を覆して、欲の皮を脱いて見せてやるぞよ。海は一つ^{へだ}隔てて居りても日本のかみの宝であるから、外国の自由には神界から致させんぞよ。かみが一度申した事は何時^{いつ}になりても間違いは無いぞよ』

文中に金、銀、銅、鉄、水鉛、石炭、木材、食物とあります。ここで注目したいのは水鉛と石炭です。火力発電での石炭は昔前は大いに貢献してきました。しかし石油が大量に生産されると日本ではこれまで主流であった水力や石炭火力は下火となり石油や原子力が主力となりました。エネルギーの20%を原子力に依存してきた日本が、原子力を放棄すると何に頼っていけばよいのでしょうか。

上の伊都能売神諭には石炭はあっても石油が出ていません。神諭を初めて読んだとき不思議に思いました。エネルギーの主流になろうとしているとき何故石油が出ていないのか。時代が移り、何となくその意味がわかったように思います。化石燃料の内、天然ガスや石油の埋蔵量は石炭に比べれば少なく、数十年といわれおり、動物性燃料です。その点石炭は埋蔵量(130年以上)も多く、世界に広く分布しており植物燃料です。日本での一次エネルギーに占める石炭の割合は21% (原子力10%、石油44%。2007年)ですが、中国や米国、ドイツでは大きく依存しています。そして今注目なのは石炭の液化、ガス化技術と石炭ガス化複合発電によって石油並の効率を確保でき、二酸化炭素(Co2)があまり出ないことです。

さて将来の最終エネルギーは何でしょうか。聖師様は「霊気」と仰っています。第4巻第50章「神示の宇宙(その五)」に 注:【】内の○/△は 巻/章を示す

『電気なるものは、前述の如く宇宙の霊素、体素より生成したものであるが、其の電気の濫用のために、宇宙の霊妙なる精気を費消すればするだけ、反対に邪気を発生せしめて宇宙の精気を抹消し、為に人間その他一切の生物をして軟弱ならしめ、精神的に退化せしめ、邪悪の気宇宙に充つれば満つる程、空気は濁り悪病

発生し害虫が増加する。されど今日の人間としては、是以上の発明はまだ出来て居ないから、五六七神世出現の過渡時代に於ては、最も有益にして必要なものとなつて居る。モ一歩進んで不増不減の靈氣を以て電氣電話に代へる様になれば、宇宙に忌はしき邪氣の発生を防ぎ、至粹至純の精氣に由つて、世界は完全に治まつて来る。この域に達するにも、今日のやうな浅薄なものを捨て、神靈に目醒めねばならぬ】【4/50 神示の宇宙（五）】

これは、ドラゴンボールでおわかりのように宇宙に漲みなぎっている氣、靈氣です。宇宙には無尽蔵にあり、それを利用すれば天人の羽衣のように簡単に空中を移動することができるそうです。そこまで行くには五十世紀の未来かも知れませんが、それまでのエネルギーの一つとして石炭が有力なものではないでしょうか。

今このエネルギー問題を考えるとき、神様とは実に用意周到な方であると思ひました。宇宙の誕生からミロクの世実現までの道筋を天地剖判のおりに計画されていたのだと思ひます。この宇宙は五六億七千万年を経て完成すると示されています。天地の剖判は宇宙誕生からおよそ50億年後と思ひますが人類が誕生してエネルギーを大量に使い始める事を想定しておられます。およそ今から3億6千万年前から巨大なシダ類が繁茂し爬虫類が闊歩する石炭紀が訪れます。この層は古生代の終わりの2000万年の間に堆積したと考えられており、放射性炭素年代測定でおよそ3億1000万年前から2億9000年前のものとされます。その後氷河期が訪れます。

この3億年前の出来事が今我々が使うエネルギー大量消費の時代のために用意されていたのです。

靈の発達と共に体の発達も同時に必要です。この宇宙は靈素の発生から始まって体素（元素）が生まれ宇宙は氣の遠くなるような時間を費やして人類が生まれ、神々の本格的御活動が始まります。とにかく宇宙の進歩には我々の一生では考えられない長い長い時間が必要です。それを見越して神様は事前に用意しておられたのです。

さて古事記に伊邪那美命が迦具土神を産んだ事が原因でお亡くなりになり、黄泉の国に赴かれます。そこで伊邪那岐命は怒って迦具土神を殺します。此の事について靈界物語では迦具土神とは産業革命から起こった火力文明を指すと思ひます。

『伊弉諾命は即ち天系靈系に属する神であります。迦具土神が生れ火の神様の荒ぶる世となつたのであります。この火の神を生んで地球の表現神たる伊弉册命が神去りましたのであります。この世の中は殆ど生命がないのと同じく、神去りましたやうな状態であります。

『子の一つ木に易へつるかも』そこで伊弉諾命は我が愛する地球が滅亡せむとして居るのは、迦具土神が生れたからであるが、火力を以てする文明は何程文明が進んでも、世の中がこれでは何にもならぬ。地球には換られぬと宣らせ給はつたのであります】【8/39 言靈解一】

人類が誕生して草や木を燃やすことから始まり、次第に大きなエネルギー（火力）を使いこなすことが出来るようになりました。現代では原子の火を手にしりましたが一時的な物です。人類の進歩にとってエネルギーは欠かせないものです。産業革命以後我々人類は様々な形でエネルギーを得るため火を扱ってきました。原子力もそうだし、戦争も戦国時代の火縄銃どころではありません。火を扱うことで文明は大きく発展し利益も得ましたが、人類の発展の中で（古生代の後半＝石炭）恐竜が闊歩する時代は将来のエネルギー、石油や石炭を確保するには必要不可欠な時代でした。大きな蒸気機関を動かすには石炭や石油はまさに時代を進めて行く必要アイテムだったので。しかし、火力による文明は大きく発展し利益をもたらした反面、利権という魔物を生み、持てる物と持たざるものが生まれ、弱肉強食の社会を生み、さらに地球環境を破壊してきました。このまま行けば人類は大火傷をし、下手をすると滅亡するかも知れません。そこで聖師様は将来のエネルギーとして火を使わないエネルギー、靈氣がエネルギーの源になるとお示しになっているのです。

ここまで行くには長い長い時間が必要でしょうが石炭はその間を繋ぐアイテムの一つでしょう。

もう一つは水鉛です。水鉛はモリブデンと言って1778年に輝水鉛鉱を硝酸と反応させて分離した酸化物として発見され、第一次世界大戦の頃に実用化が進んだようです。硫化モリブデンは摩擦係数が低いことから、工業用の潤滑油やエンジンオイルの添加剤に用いられました。モリブデンの多様な用途。たとえば、ハイブリッドカーやロケットの電子基板。最近では液晶パネル製造ラインに、医療分野でもモリブデン99は癌の診断などにも利用されています。また、ヒトを含む全ての生物種で必須な微量元素です。人体には体重1kgあたり約0.1mg含まれていると見積もられており、骨、皮膚、肝臓、腎臓に多く分布しています。

この水鉛は第一次世界大戦中（1914～18年）の戦車に使われ実用化していくのですから、一般的にはほとんど知識のない物です。その水鉛がわざわざ伊都能売神諭（大正8・1919年）に書かれていることは何を意味するのかわかりませんが、将来大きな働きをするのは間違いないことでしょう。

竜宮の御宝

さらに伊都能売神諭にある竜宮の御宝を裏付けるものに以下のことが載っています。

入蒙記 第二九章 端午の日

真澄『今度の蒙古入には霊界物語中の実現が大分含まれて居ると、腹の中で数へて居ましたが、お蔭でモ一つ判りました』

など語り合ひつつ、草の褥に星蒲団の大陸自由ホテルを目指して行く。

六月六日陰曆五月五日の正午頃、遠く山屏風を引廻した広大な草野の中に、缶詰やメリケン粉製の餅などくさぐさの食料を口にし乍ら雑談に耽つて居るのは、云ふ迄もなく日出雄の一行である。

此日五月五日の吉日とて幹部連は記念撮影をなし、各兵団はそれぞれ適當の地位をとり、団旗の下に集まつて遙に護衛の任務を尽してゐる。

岡崎『なんとこれ丈広い野原に、真中を河が流れてゐるし、草の出来按配から見ても地味が佳さ相だが、立派な水田が出来るやうに思ふね』

守高『私が北海道に居つて開墾に従事した経験から考へても、立派な水田ができます。今日迄旅行した蒙古の中で公爺府以西は素晴らしい沃野が遊んでゐますなア。氣候風土の感じから云つても、北海道に出来る物は何でも作れますよ、惜いものですな』

坂本『これ丈私に頂けたらモウ満足です。半分は水田や畑にし、半分は牧場にして好きなナイスと、羊の皮の天幕張の蒙古包で十分だから、一緒に暮して見たいなア』

真澄『坂本さん、ナイスは後から送り届けるとして、先づ君一人此処へ残つて準備に取掛つたら何うです、アハハ、』

坂本『アハハ、マア優先権さへ認めて頂けりや結構です』

真澄『實際何等束縛も干渉もないこんな大天地が豊に横たはつて、人間さまのお越しを待つてゐるのに、狭苦しい所で唾み合ひしてゐるのは気の毒なものだ。時に曼陀汗さん、此附近に鉱山の良いのはありませぬか、早く趙徹さんに一億円儲けて貰ひたいですからな、アハツハ、』

曼陀汗『サアよく存じませぬが、外蒙の砂漠の中には水晶洞がチヨイチヨイあります。又中央の火山脈の水源地の樹木鬱蒼たる所にルビーの岩があると聞いてゐますが、まだ私は行つた事はありませぬ』

坂本『外蒙の喇嘛廟には十二三の子供位の大きさの金無垢の仏像があるさうだから、それ一体丈せめて頂戴したいものだなア』

井上『坂本さん、今そんな重い物を貰つたつて運搬に困るよ。それよりも新疆へでも行つて見ろ、砂金の

大粒が幾らでも転がって居るサ』

盧占魁『新疆は世界の宝庫だと私は思ひます。山間の堅い氷の様な雪を欠いで引起すと、雪の裏に十八金程度の砂金がベツタリくつついて居るやうな所は珍らしくない位です』

日出雄『私の靈界で見てる所では、^{アルタイ}安爾泰地方から^{シンキヤン}新疆の^{チベットざかひ}西蔵境の方面には、砂金と云ふより^{むし}寧ろ金の岩とも云ふべき程の物が沢山隠されてゐる。鉱物のみでなく、新疆は神の^{すうえう}経綸に枢要な場所で、一般に天恵の豊富な土地なのだ』

真澄『先生、御神諭に示されてる通りですがな。実地を見る迄神を信じない人が多いのだから随分面倒ですなア』

日出雄『だから神様は骨が折れるのだ』

盧占魁『併し^{しか}新疆へ入り込むには勝手を知つた者に案内させないと、妙な砂漠がありまして、うっかり踏み込むものなら人馬諸共ズブズブと^{めい}滅入り込んで了ひます』

真澄『先生、今^ろ盧さんの言つた場所は靈界物語第十巻の安爾泰地方の章に説明されてる場所に当るぢやないでせうか』

日出雄『さうらしいなア』

注：日出雄は出口聖師。真澄は松村真澄。守高は植芝盛平

これは内蒙古の興安嶺へ向かっていた一隊が南下したころの会話です。寒い所と書かれていますが、このあたりの地下は永久凍土で冬は極寒の地です。ロシアとの国境近くでロシアや欧米諸国が狙っていたようです。聖師が蒙古へ行かれたのは素盞鳴尊の足跡を辿ったことでもあります。将来ミロクの世を迎えるための資源としての型として行かれたのではないのでしょうか。

地球の温暖化は何が原因か

近代産業の発展により二酸化炭素の排出が増え、それにより地球が温暖化しているというのが世界の常識というか一般常識です。しかし学者の中にはこれとは違った、様々な意見を持つ人達がいて、完全にこれだというものがありません。

聖師様は以下のようにその著作の中で述べられています。

玉鏡 574 世は持ち切りにさせぬ (昭和6年5月)

地球一日の傾斜を小傾斜と云ひ、一年の傾斜を中傾斜と云ひ、六十年振りの傾斜を大傾斜と云ひ、三千六百年振りのを大々傾斜と云ふ。この大々傾斜の大変化の影響をうけて、気候が変る。従つてすべてのものが変つて来るので、寒い所が暑く、暑い所が寒くなつて世が変るのである。神諭に「世は持ち切りにには致させんぞよ」とあるのは此意味である。

玉鏡 611 神示の宇宙 (昭和7年5月)

『靈界物語』に神示の宇宙として示してあることは、決して今日の学者に分らせむが為ではない。幾百年後の智者学者の為に書き残して置くのである。王仁の云ふ地平説は、決して扁平な方形を云ふのではない。例へば餅の如き形を云ふのである。月は大地を一周するが、太陽も地球もただ傾斜運動をするだけで、同じ処を動かないものである。その傾斜にも大傾斜、中傾斜、小傾斜がある。六十年目に大傾斜するのであつて、その為めに気候も変化する。最近の気候の変化はラヂオなどの影響ばかりではない。

玉鏡691 太陽の黒点 (昭和7年3月)

今年(昭和七年)の暖かいのは太陽に黒点が出来たからだ云ふ学者があるやうだが、さうではない。大

地が熱してゐるからである。大地が熱して暖かいから、それが黒点となつて太陽面に表はれて居るのである。つまり黒点が出来たから暖かいのでなくて、暖かいから黒点が出来たのである。総て之は大地が元である。一般に太陽が大地より非常に熱いものの様に思はれ、地上の熱は太陽のみから来るやうに思はれてゐるが、実は大地が元で熱いのである。太陽も素より熱い事は熱いが、大体元は大地から反射した熱であつて、その熱が高まり過ぎて燃えて居るのである。太陽が大地より熱く、大地の熱は太陽のみから来るものなら、太陽に近い上の方程——高山程暖かい筈だが、事實は之に反して大地に近い処程熱いのである。大地の熱は其儘、または太陽と反射し合つて空気の濃度に従つて空気中に籠るのである。故に空気の稀薄になる処程熱度は低下するのである。之は富士山の如き高山に登ればよく判る、上へ登る程空気が稀薄になる、それで高い程寒くなる。要するに大地が余り暖かなので其熱が太陽面に反射し灼熱して、ひどい処は赤色を呈して燃えてゐるのであつて、その赤い部分が黒点に見えるのである。凡て赤は黒く見えるもので、写真に赤色が黒く映つて見えるのも同じ理である。

水鏡 214 ラヂオは気候を調節する (昭和2年12月)

西村さんが仏蘭西から帰朝の途次西比利亜を通過して、気候が案外暖かであつたと云ふて居たが、近來地上の気候はラヂオ使用の爲め大氣が大変化を來たして居るのである。神諭にある「世界中を柵掛け曳きならず」と云ふ事を皆が小さい意味に取つて、国土とか、經濟とかの上とのみ思つて居るやうであるが、神様の柵掛け曳きならしはそんな狭義の意味のものでは無い、気候迄も柵掛け曳きならされるのであつて、ラヂオも其働きの一部分を勤めてゐるのである、ラヂオは音波を輸送する如くに、寒氣、熱氣をも輸送するもので、寒帯の寒氣は熱帯に運ばれ、熱帯の熱氣は寒帯に運ばれて世界中の温度が段々平均して來るのである。平均すると云ふても、比較的の事であつて、熱帯は矢張り暑く、寒帯は冷たいが、寒暑の度が今迄のやうに激烈でないやうに調節されるのである。

温帯は余り変化は無い。「北がよくなるぞよ」との神諭も亦這般の消息を伝えて居るのである。又大本祝詞の「暑さ寒さも柔らかに云々」とあるも此事である。

他に玉鏡 696 気温の調節 (昭和7年3月) がある

玉鏡の「太陽の黒点」での大地の地熱？は地球の(大氣を含めて)温度と大きく関係していることが判ります。マグマの活動がなければ太陽の熱だけで現在の地球の気温を維持出来ないことが推測出来ます。太陽は熱を四方八方に放射しているのではなく、ただ地球に向かつてのみ放射していると、どこかに書いてありました。

しかし現代科学では正反対で太陽熱が99.97%、地熱は0.025%、化石燃料が0.025%とされています。だとしたら、これは地熱ではなく靈的な関係でしょうか。

太陽の黒点は実に興味深いものが有ります。「神示の宇宙」では我々が思つている地動説でも天動説でもありません。むしろ傾斜運動説と言つた方がよいかも知れません。太陽の黒点同様現代科学を引っくり返すものですが、さて、眞実か荒唐無稽か貴方はどう思われますか。理外の理いくらでもある大宇宙。

神示の宇宙 (二)

『自分の宇宙観はすべて神示のままなれば、現代の天文学といかなる交渉を有するや否やは全然自分の関知するところにあらず。自分は神示に接してより二十四年間、ほとんど全く世界の出版物その物から絶縁しゐたり。したがつて現在の天文学がいかなる程度にまで進歩發達しゐるかは無論知らざるなり。ゆゑに自分の述ぶる宇宙観に対して、ただちに現代の天文学的知識をもつて臨むとも、にはかに首肯《納得すること》し難き点少なからざるべし』と書かれています。

自分の説は高熊山の修行から二四年間、仙人の様に俗界を覗かなかったので科学がどこまで進歩しているか何も知らないと述べられていますが、本音のところは、聖師様の説は今の世では誰も信じてくれない、よく言えば奇想天外、悪く言えば誇大妄想狂、癡狂痴呆（バカ）の説として、誰も信じないのでこう言っておられるのです。それが証拠にずっと先の将来のために書く（玉鏡—神示の宇宙）のだとあります。また、どこかに新聞記事は丹念に調べて記録しておくようにと書かれていたように記憶していますし、時事問題が上手に物語の中に取り入れられています。そして何よりこの知識の豊富さは大正10年に書かれた書物としてはまさに驚嘆に値し、自湧的知識です。

温暖化はミロクの世への一步

二酸化炭素に温室効果があることは間違いないでしょうが、地球に最大の温室効果をもたらしているのは本当は水蒸気です。全体の90%を水蒸気がまかなっているとする説があります。もしそうだとしたらCO2はそれほど問題はならないのでは。

ウィキペディアによれば「温室効果とは、大気圏を有する惑星の表面から発せられる放射（電磁波により伝達されるエネルギー＝熱）が、大気圏外に届く前にその一部が大気中の物質に吸収されることで、そのエネルギーが大気圏より内側に滞留し結果として大気圏内部の気温が上昇する現象。」〔太陽から来る熱が地球の表面で反射し大気中にある物質に吸収され、熱が留まり気温が上昇すること〕と言うことのようにです。玉鏡や水鏡に書かれているようにラヂオや電信電話が大気の気温を運ぶというのは電波が電磁波だからです。極端に言えば電磁波＝熱だからです。電子レンジがどうして物を暖めるかと言えば電磁波そのものは熱ではありませんが、電磁波が物体に吸収されると物体を構成している分子に作用して活動を活発化させるからです。特に物体の中にある水の分子に作用して水の分子が活動するので熱が発生するのです。聖師様は水鏡「ラヂオは気候を調節する」（昭和2年=1927）で電波（電磁波）が熱を運ぶと言っておられます。この時代ほとんどの人が電波が電磁波だとは知らない時代に既に電磁波の影響を示されているのです。これは驚きです。そして、地球の温暖化はミロクの世を迎えるための立替えのようです。

現代社会は温暖化の悪影響を盛んに強調されていますが地球の長い歴史を見れば大きなスパンで気象は変化しています。このまま行けばここ100年で地球の平均気温が4度上昇するとか、北極の氷が溶けて海面上昇が起これ陸地が狭められるとか、生態系が変わり食料が出来なくなるとか。しかし我々は常に先を見ているようで本当はせいぜいが50年ぐらいです。地球の歴史からすればほんの一瞬です。これまで人類は様々な気象の変化に適応して今日があるので、温暖化も神様のお仕組の一つでこの試練はどうしても避けられない事なのです。

物質的に見ればそうした長い歴史の結果は必ず人類に進歩と発展をもたらしてきました。いま温暖化を懸念する事でエネルギーの方向性を考え、無駄遣いや安全性を考える上で重要な転機ではないでしょうか。

参考

- 熱放射は、伝熱の一種で、熱が電磁波として運ばれる現象。または物体が熱を電磁波として放出する現象をさす。熱輻射、あるいは単に輻射ともいう
- 電磁波を波長の短い順位に並べると
ガンマ線、X線、紫外線、可視光線、赤外線、電波、マイクロ波、超短波、短波、中波、長波、超長波、極超長波。これらはすべて電磁波の仲間です。

宇宙創造・ 神示の宇宙とビッグバン理論

宇宙創造は多くの人にとって最も興味深いものの一つではないでしょうか。日本の古典、最新の宇宙科学、そして神示の宇宙はどう語っているのでしょうか。

注；《 》内は筆者の入れた注

古事記、日本書紀による天地開闢^{かいびやく} ！

『古事記』では冒頭に「天地初発之時」（あめつちのはじめのとき）と「初め」が想起されるが、ここには天地がいかにか創造されたかの記載はない。

『日本書紀』における天地開闢は混沌が陰陽に分離して天地と成ったと語られる。続いてのシーンは、性別のない神々の登場のシーン（巻一第一段）と男女に別れた神々の登場のシーン（巻一第二段・第三段）に分かれる。本文では、太古、天地は分かれておらず、互いに混ざり合って混沌としていた。しかし、その混沌の中から、清浄なものは上昇して天となり、重く濁ったものは大地となった。そして、神が生まれたとある。

宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじのかみ）は古事記に登場するが生命力を神格化した名前である。日本書紀では可美葦芽彦尊等の働きは、まだこの世界が整っておらず、脂が浮かんでまるで海月のように漂っていた頃、そこから葦の芽のように燃え上がるものがあつた。その萌え上つたもので出来たのが「宇麻志阿斯訶備比古遲神」である。

アシの芽を神格化することで成長力を現し、海辺や川辺の葦原の近くで生活していた人々の世界観を現し、水が豊富で肥沃な低湿地が、やがて稲田となって国の発展の原動力になっていく。（インターネットより引用）

その他、聖師様は76巻に世界の宇宙創造説や天地開闢説を列挙しておられます。

科学では ！

現在一般的に信じられている宇宙論はビッグバン理論という。「ビッグバン理論（火の玉理論・ビッグバン仮説）に基づいたビッグバン・モデルでは、宇宙は時間と空間の区別がつかない一種の「無」の状態から忽然と誕生し、爆発的に膨張してきたとされる。近年の観測値を根拠にした推定により、宇宙の創生は約138億年前に起きたと推定されるようになった。それは

遠方の銀河がハッブルの法則に従って遠ざかっているという観測による事実を、一般相対性理論を適用して解釈すると、宇宙が膨張しているという結論が得られる。そこで宇宙の膨張を過去へと戻ると、宇宙の初期には全ての物質とエネルギーが一か所に集まる高温・高密度状態であったことになる。この初期状態、またはこの状態からの爆発的膨張をビッグバンという。

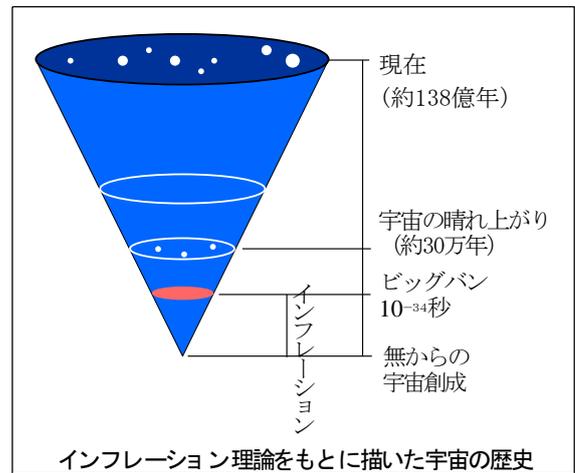
宇宙物理学者佐藤勝彦氏が提唱するインフレーション理論によると、ビッグバン以前の最初の宇宙は無から生れたと考えられている。常識的には無という何もない状態だが、物理学的には「ゆらぎ」のある状態のことをいう。それは、物理的に可能な限りエネルギーを抜いた状態のことをいう。実はエネルギーを抜くだけ抜ききっても、振動、いわゆる「ゆらぎ」が残るのだ。この「ゆらぎ」は、素粒子（物質の最小単位の粒子）の生成と消滅が繰り返されることにより起きていて、物理的には消すことができない。いい換えれば、無と有の間を行ったり来たりする

(ゆらいでいる) 状態ということである。その状態から突然パッと宇宙が生まれたと考えられている。しかし、無からの創成論はまだ完成しておらず、これからの研究が期待される分野である。

この生れたての宇宙は、真空のエネルギーを持っており、このエネルギーは急膨張する性質があり、極めて小さかった宇宙が直径1cm以上もの火の玉宇宙になった。

すべての物質は、インフレーション時代につくられた莫大なエネルギーがもととなっている。ビッグバン (火の玉宇宙) 以後、宇宙の膨張とともに素粒子ができ、それが陽子や中性子に、さらに原子へと物質生成が進んで行く。そこまでが、だいたい宇宙創成から30万年頃のことと考えられている。そして星ができ、銀河や銀河団が形成され、私達人間などの生物がつくられていったのである。

しかし、このビッグバン理論も従来の論理だけでは説明しきれないため、現在それを解決するように別の理論が生まれている (インターネット等より引用)



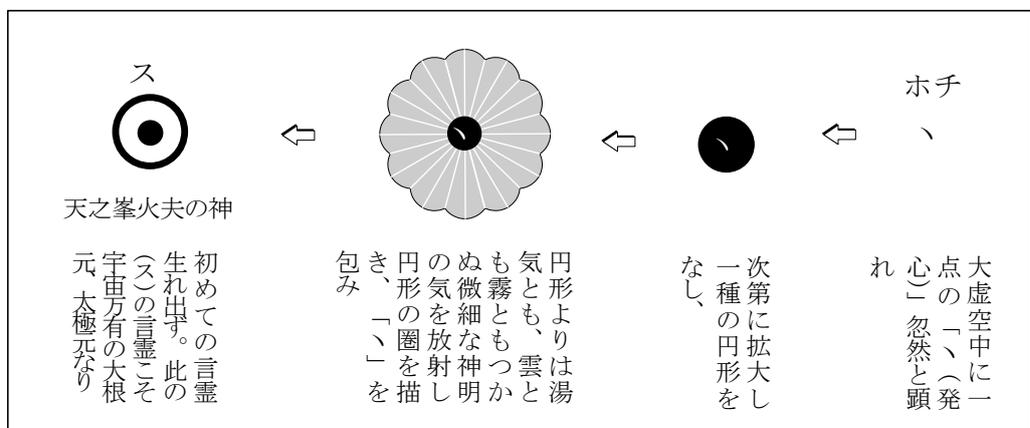
さて、科学とは言え、皆さんは信じられますか？ いや、信じていいのだろうか？

神様はどう語られているのでしょうか！

天祥地瑞 第73巻第1章 「天之峯火夫 (あまのみねひお) の神」 に宇宙の初めが書かれています

『天もなく地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、忽然と顕れ給ふ。この、たるや、すみきり澄みきらひつつ、次第々に拡大して、一種の円形をなし、円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏を描き、を包み、初めての言霊生れ出でたり。此のの言霊こそ宇宙万有の大根元にして、主の大神の根元太極元となり、皇神国の大本となり給ふ。我日の本は此のの凝結したる万古不易に伝はりし神霊の妙機として、言霊の助くる国、言霊の天照る国、言霊の生くる国、言霊の幸はふ国と称するも、此のの言霊に基づくものと知るべし。……清朗無比にして、澄切り澄きらひスースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び広がり膨れ上り、ついには極度に達してウの言霊を発生せり。』

と宇宙創造が語られています。上記文章にある「、」はホチとフリガナが振ってあったので、ポチの誤りではないかと思ひ出します。ポチは小さな点を意味するので、ではホチとは



なんだろうと思ひながら読み進めました。第一章を何度か読む内に、どうしても気になり、ホチの意味を調べてみると、私にとっては大きな驚きというか感動でした。

広辞苑によると《ほち： 発意、ホッチの約。発心に同じ。 発心： 菩提心を起すこと。また一般に、あることをしようと思ひ立つこと。発起》とあります。

宇宙の初めについての冒頭の文章。天も地も宇宙もなく、しかし大虚空中にとあるので虚空《何もない空間。仏典では、何も妨げるものがなく、すべてのものの存在する場所としての空間》即ち何も妨げるものがない大空間が存在したことになります。そこに『一点の^{ほち}、忽然と顛れ給ふ』とあるように、^{ほち}（発心）、即ち宇宙を創造しようとする思い、意思が生まれたのです。したがって神様は宇宙が誕生するその以前から居られて、明確な意志を持って思いを実行されたということです。

我々が何か行動を起こす時、まず思いを感じて発心します（思い立つ）。その思いが膨らみ次第に行動へと移っていくのです。宇宙創造もまた同じように、幽の幽の世界に居られる神様に発心があったのです。

霊界物語には宇宙が出来て56億7千万年と書かれています。天之峯火夫（あまのみねひお）の神はそれ以前から居られ、宇宙を創造するという強い御意思によって、我々には認識出来ない虚空中にその思いが次第に拡大して一種の円を作り出します。したがってこの宇宙創造神の思いとその活動を称して天之峯火夫神と申し上げるのです。

第3巻第50章「安息日」には

『大宇宙の太初にあたって、きはめて不完全なる靈素が出現し、それが漸次発達して靈の活用を発生するまでの歳月はほとんど十億年を費してある。これを神界においては、【ヒツカ】（一日）といふ。』とあります。

その澄みに澄んだ「^{ほち}（発心・意志）」は次第に拡大して円を作ります。その円から湯気とも煙とも霧ともわからぬ神明の気が放射されます。更にその気は円形の圈《ぐるりに囲いをしたところ。輪》を生み、初めのホチを包みます。そこから最初の言靈”ス・”が発生することになります。◎の字形がその事を如実に物語っています。そしてこの時点ではまだ我々から見ると何もない、無形、無声、無色の世界（幽）なのです。

第73巻第1章ではさらに、

『◎の活動を称して主の大神と称し、又天之峯火夫の神、又の御名を大国常立神言と奉称す。大虚空中に、葦芽の如く一点の^{ほち}発生し、次第々々に膨れ上り、鳴り鳴りて遂に神明の形を現じたまふ。◎の神靈は◎の活動力によりて、上下左右に拡がり、◎極まりてウの活用を現じたり。ウの活用より生れませる神名を宇迦須美の神と言ふ、宇迦須美は上にのぼり下に下り、神靈の活用を両分して物質の大元素を発生し給ひ、上にのぼりては靈魂の完成に資し給ふ。今日の天地の発生したるも、宇迦須美の神の功なり。ウーウーウーと鳴り鳴りて鳴極まる処に神靈の元子生れ物質の原質生まる。故に天之峯火夫の神と宇迦須美の神の妙の動きによりて、天津日鉾の神大虚空中に出現し給ひ、言靈の原動力となり七十五声の神を生ませ給ひ、至大天球を創造し給ひたるこそ、実に畏き極みなりし。再拜。』

以上のように更に宇宙創造が語れています。スの言靈の活動力を称して主神と言い、天之峯火夫の神、また大国常立神言と申し上げるのです。ミコトは本来「神言」で神の言靈、ここではス声の活動力のことです。

天之峯火夫の神とは一般的に知られている天之御中主神以前の神名で、宇宙創造の初期におけるお働きを示すものです。天之峯火夫の神の時代、即ち宇宙の初期段階を「天（あま）の世」と言い、さらに進んだ段階から今を天之御中主神の時代で「天之御中之世」といいます。

大虚空中に葦の芽のようにホチ（発心）が発生したとも書かれています。葦の芽はとても成長が早く一日に15cmも伸びるそうです。

『膨れ上り、鳴り鳴りて遂に神明《神》の形を現じたまふ。◎の神靈は◎の活動力によりて、上下左右に拡がり、◎極まりてウの活用を現じたり』

スの言靈はスースースーと鳴って虚空中に拡がり、次第に神の形◎の神靈となって◎の活動力が生まれ、拡がり、膨れ上がりついに極まって”ウ”の働きが生まれます。ウの活動（ウ声）を宇迦須美の神と申し上げます。ウ声の活動力は上と下に二分して働き、上にのぼっては靈魂の完成の元となり、下に降って物質の元素を発生します。こうして天地が発生したのも宇迦須美の神の功績です。ウーウーウーとウ声の活動力の極まった処に神靈の元子が生

れ、また物質の原^{もと}となる物質が生まれたのです。そこに、天之峯火夫の神（ス）と宇迦須美の神（ウ）の言霊の絶妙の活動力によって、大虚空中に天津日鉾の神の活動力が出現し、言霊の原動力となって七十五声の神がお生まれ（活動）になり、至大天球（大宇宙）が創造されます。考えればこれは実に畏れ多い事です。
以上からも理解^{わか}るように神とは宇宙に充満する声音が持つ活動力に付けられた名前です。

此大宇宙を我国にては、之を至大天球^{たかあまはら}と言ひ、大宇宙の主宰、之を天之峰火夫の神または天之御中主と言ひ、万有一切、之を神と言ひ、此活動力、之を結び^{むす}といふ。（而して尚之^{しかしてなおこれ}を言霊学の上より言ふ時は、至大天球は一声にあ^{しだいかん}と言ひ、天之御中主は之^{ひとこえ}を一声にす^{おさ}といひ、す^{おさ}分れ発して七十五声となり、此七十五声は結びの力によりて、更に発動すれば万声となり、帰り納まれば一声のす^{おさ}に蔵まる）是一切法界の四大観なり。此四大は即ちあらゆる声音なり。天之御中主の発動、之を神といひ、神霊元子^{しんれいげんし}と言ふ。神霊元子とは、こころなり、こころとは絶対の霊機が、此処彼処と発作するの謂なり。此のこころの発作が更に現れたるもの即ちこゑなり。こゑとは即ち心の柄なり。此声広義一面に又をと^{ほっさ}と言ふ。をととは外よりを^{ほっさ}に結び当るものあるに対して、とを結び、対ふるの謂にして、緒止なり。【79/総】

この大宇宙を我が国では至大天界（たかあまはら）といひます。大宇宙の中心にあつて御支配になつておられるのが天之峰火夫または天之御中主と申し上げ、これを神といひます。神の活動力を結びといひます。（これを言霊学から言えば、あ^おの一声になり、天之御中主は一声です^おとなります。すは分れて七十五声となり、この七十五声は結びの力（活動力）によって、更に活動し万の声となり、またす^おの一声に帰り納まる）これが全世界の四大観（一切の物体を構成する地・水・火・風の四元素）となります。四大とは全ての声音（万声）です。天之御中主が発動された状態を神といひ、神霊元子といひます。神霊元子とはこころで、こころとは絶対の霊機（霊の働き）が、あっちこちで発作（現れ起こる）するという意味です。このこころの発作が更に現れたものがこゑです。こゑとは即ち心の柄（動かす力）であり、この声を広義に捉えるとをととなるのです。

〔をととは外よりを^おに結び当るものあるに対して、とを結び、対ふるの《結び応える》謂にして、緒止なり。〕

「をと」とは外より魂（を）に反応（当る）し、結び応える（と） という意味で、緒止（魂をつなぎ止めるもの）である？〕

【法界】 【仏】（ホッカイとも）思考の対象となる万物。真理のあらわれとしての全世界。

【発作】 現れ起こる

【霊機】（辞書に無し）霊の働き？。霊の起こるきっかけ？ 【緒止】 緒：魂をつなぐもの。いのち。 止：とどめる。とどまる

《「天之御中主の発動、之を神といひ、神霊元子と言ふ。神霊元子とは、こころなり」とあります。天之御中主が活動を起こされることを神といひ、神霊の始まりであり心（思い）である。初めに天之峰火夫の神のご活動によってス（す）の言霊が生まれ、それがウ声、ア声と発達し、ついに七十五声を生み万声へと成っていった。従つて万声はまた、スへと帰るのです

「こころ」とは、いであり、「此処彼処と発作する」とは物理学で言う宇宙の始めに起きた「ゆらぎ」でしょうか）

インフレーション現象によって高温高压に凝縮された一点 ● からの爆発が一気に膨張して行きます。そして、さらにその爆発により現在ある全ての物質が形成されて、星々が生まれ宇宙へと拡散して行くのです。物語ではこのスの言霊こそが宇宙万有全ての大根元、太極元となるのです。『◎の活動力』とあるように、宇宙は常に活動しているのです。ゝである神の発心は円形の圏をなし、スースースとスの言霊は活動を開始し、スの活動力が拡がり膨れて「ウ」の活動力を生みます。ス声とウ声の言霊（活動、原動力）が「神霊の元子と物質の原質《もととなるもの》」を生むと書かれています。これはインフレーション理論を裏付けるものです。

天祥地瑞は1933年（昭和8年）の御口述です。ビッグバン宇宙論はベルギーの司祭で天文学者のジョルジュ・ルメートルが1927年（昭和2年）に提唱したのが初めです。1948年（昭和23年）にジョージ・ガモフがあらたに主張、1960年代（昭和35年以降）になつて一般的に受け入れられるようになり、70年代に起こつた様々な疑問を

1981年に佐藤勝彦氏等の提唱したインフレーション理論が解決を与えます。この両理論が世間に受け入れられる前に聖師様は既に発表されていることとなります。『茲に於て神は時機を考へ、弥勒を世に降し』【48/12 西王母】と示されていますが、ようやく天祥地瑞の言葉が多少なりとも理解出来る時代が来たようです。

第13巻総説の神統別に「先づ宇宙の本体之を人格化して、天之御中主神しやう たてまつと称し奉る。宇宙の活動力しやう之を人格化して高皇産靈たかみむすび かむみむすび、神皇産靈の神と称し奉る」とあり。更に第67巻 第6章「浮島の怪」の“神力と人力”に

一、宇宙の本源《みなもと。根源》は活動力にして即ち神なり。

一、万物は活動力の発現《起こり》にして神の断片なり。

と、神とは即ち活動力むすび（産靈）であり、又万物の一つ一つの活動力を総合したものを神というたと述べられています。この宇宙そのものが神（天之御中主神）であり、その活動力おほくとこたちのかみ（大国常立神言）をまた神というのです。宇宙は常に止まることなく活動し、進展主義によって宇宙は膨張しているのでしょうか。

その後、ア、オ、タ、カ、マ、ハ、ラと次々に言霊（活動力、原動力）が生まれ、ついに七十五声によって宇宙が形作られて行きます。

宇宙創造の意義

宇宙創造神ほちの、である発心によって何もない虚空中に宇宙が創造されました。聖書や先の第3巻の「安息日」では七日でこの宇宙が出来たと書かれています。これは宇宙形成の段階を7つに分け、七日目に弥勒の世が完成するというものです。最初の段階一日（ひつか）は上記天峯火夫の神や宇迦須美の神のご活躍する世界で、霊素が生まれるまでに10億年を費やし、幽の幽の世界は我々から見るととき何も（影も形も）認識出来ない隠れた世界の出来事です。この幽の幽の世界はインフレーション理論以前の出来事で今の科学では到底解決できない世界です。

その後、天界では神々様がお生まれになり、次第に森羅万象ができ、我々が認識する宇宙が六日（むゆか）56億年を経て一応の完成を見ます（物語では荒工事を終えてと表現）。

「かくのごとくして天主てんしゆは宇宙万有一切をムユカに創造された。それより天主は一大金剛力を發揮して、世界を修理固成し、完全無欠の理想世界いはゆる五六七の神代、松の世を建設さるるその工程が七千万年の歳月であつて、これを【ナナカ】（七日）といふ。」【3/50 安息日】

最後の七日（七千万年）は完成（修理固成）へのステップです。この七日目の段階で初めて人類が生まれます。この人類の誕生によって、初めて神霊は顕の顕界（現界）で活躍することが出来る宇宙完成の最終段階に入ってゆくのです。それは、霊体（陰陽）のバランスが整わない世界に、体の発達を待ち、ついに顕幽神の三千世界に住む神々によって霊主体従の秩序が整った理想世界、五六七の世が実現するのです。即ち、地上に再生した現界人が霊主体従の教をよく守り地上天国が建設されます。そして昇天した現界人は天国に復活し、霊界、地上共にミロクの世界を迎え益々栄えるのです。

「\」で始まり、「**こころ**とは絶対の霊機が、此処彼処と発作するの謂なり」はインフレーション理論の「ゆらぎ」に似ています。初めの10億年は湯気とも煙とも霧ともつかぬ微細なる気（霊素）が生まれます。インフレーション現象の始まりでは形が有ってないようなもので生まれたり消えたり（ゆらぎ）しています。次の10億年で物質の元（体素・元素）が生まれます。ここからが本当の意味でのインフレーション現象で、次第に膨張し10⁻³⁴秒後にビッグバン現象が起こり、現在の宇宙へと繋がって行くのではないのでしょうか。

宇宙科学は観測によって証明されたと言っても、その理論はあくまでも仮説です。今の科学は体にだけ目を向け、幽（霊）である隠れた世界が有ることすらわからない状態です。第48巻 第1章「聖言」に『今日のすべての学者は宇宙の一切を解釈せむとして非常に頭脳をなやませ、研究に研究を重ねてゐるが、彼等は靈的事物の何物たるを知らず、又霊界の存在をも覚知せない癡狂痴呆の態度を以て、宇宙の真相てんきやうちほうを究めむとしてゐる。之を称して体主きは

霊従的研究といふ。』と書かれています。これでは科学は本当の意味での宇宙創造を見つけ出すことは出来ません。第四巻の「神示の宇宙」も現在の人間のために書いたのではなく将来の学者のために書いたと聖師様は示されています。学者は更にインフレーション理論以前の宇宙を探ろうとしています。そして「幽」の世界の存在を何となく感じているようです。それは「多世界解釈」と言う考え方で、枝分かれした複数の世界が存在し、枝分かれした世界は同時並行的に進行しているのです。「別の世界にいるもう一人の自分」がいることになりますが、それが認識されるのはいつの時代でしょうか。

蛇足として。因みに地球以外に生命体はいるかとの疑問は誰もが持つ興味深い問題ですが、聖師様は「神示の宇宙」で断じていないと示されています。先の佐藤勝彦氏が加藤藤次とのTV対談の中で「物理学者は太陽系惑星は宇宙ではありきたりな存在であり、同じような惑星が無数にあるのでどこかに地球外生命が存在すると考えている。しかし、生物学者は複雑な生命システムから見て、生命が生まれるのは奇跡中の奇跡でこんな偶然はほとんど考えられない」と言っていました。神様がどれほど生命を作り出すのにご苦労されたかが忍ばれます。

参考までに過去の宇宙論をウィキペディアより載せます。

この宇宙が出来た初めは上記ウィキペディアの文章が示すように、ギューと高温高压に詰まった、小さなポチが爆発して次第に四方に広がったのです。神示の宇宙創造とよく似ています。

宇宙について説明するにあたり、まず人類がどのように宇宙の理解を深めてきたか、おおまかな流れを解説する。

宇宙論

古代から現代にいたるまで世界・宇宙のことは語られて続けている。宇宙に関する説や研究などは宇宙論と呼ばれている。古代インドのヴェーダでは無からの発生、原初の原人の犠牲による創造、苦行の熱からの創造、といった宇宙生成論があった。古代ギリシャではヘシオドスの『神統記』に宇宙の根源のカオス（混沌）があったとする記述があったが、ピタゴラス学派は宇宙をコスモス《それ自身のうちに秩序と調和をもつ宇宙または世界。秩序》と見なし、天文現象の背後にひそむ数的な秩序を説明することを追究した。秩序の説明の追究は、やがてエウドクソスによる、地球を27の層からなる天球が囲んでいる、とする説へとつながり、それはまたアリストテレスへの説へと継承された。2世紀ころのクラウディオス・プトレマイオスは『アルmagest』において、天球上における天体の動き（軌道）の数学的な分析を解説した。ヨーロッパ中世においてもアリストテレスの説に基づいて宇宙は説明された。天球を用いた天体の説明は、その精緻化とともに、そこにおける天球の数が増えていった。ニコラウス・コペルニクスは従来の地球を中心とする説（地球中心説）に対して、太陽中心説を唱えた。アイザック・ニュートンは『自然哲学の数学的諸原理』の第3巻「世界の体系について」において、宇宙の数学的なしくみを説明し、地球上の物体も太陽のまわりをまわる惑星も（それまで知られなかった）万有引力というものを導入すれば数学的原理を用いて統一的に説明できる、ということを示してみせた（こうした理論体系を構築した背景には神学的な意図があったとも指摘されている）。ニュートンが同著でユークリッド幾何学を用いつつ絶対空間・絶対時間という概念を導入したため、その後西欧では多くの人々が宇宙を無限に均一に広がる空間だと見なすようになった。しかも静的で安定的なものだと考えていた。20世紀初頭でも科学者も含めてほとんどの人は宇宙は静的だと見なしていた。20世紀になりアルベルト・アインシュタインにより宇宙の不安定なモデルが提示され、1927年ベルギーの司祭ジョルジュ・ルメートルが「宇宙は“原始的原子”の“爆発”から始まった」とする説を提唱し、この説が後

に「ビッグバン」と呼ばれるようになり、その説は最初は科学者などからも反発されたものの、やがて徐々に受け入れられるようになり、今日では多くの科学者が支持する「標準的宇宙論モデル」を構成する要素になっている。

* 古代の宇宙論 :

古代インドのヴェーダ (原初の原人の犠牲による創造、苦行の熱からの創造) 紀元前 1000 年~500 年頃

古代ギリシャではヘシオドスの『神統記』に宇宙の根源はカオス (混沌) だとする 紀元前 700 年頃

ピタゴラス学派は宇宙をコスモス (それ自身のうちに秩序と調和とをもつ宇宙または世界) 元前 530 年頃

エウドクソスによる、地球を 27 の層からなる天球が囲んでいる 前 400 頃

アリストテレスの説 (世界の中心に地球があり、その外側に月、水星、金星、太陽、その他の惑星等が、それぞれ各層を構成している。) 前 330 頃

コペルニクスによる地動説 1535 年頃

* 近現代の宇宙論 :

ニュートン (1643~1727 年) のユークリッド幾何学による絶対空間・絶対時間という概念から定常宇宙論 (1948 年) が生まれる。

ビッグバン理論 (1948 年にジョージ・ガモフは宇宙マイクロ波背景放射 (CMB) が存在することを主張、その温度を 5K と推定した。CMB は 1960 年代になって発見され)

現在は定常宇宙論。ビッグバン宇宙論。プラズマ宇宙論。弦 (ひも) 宇宙論が存在する。

なお、ビッグバン宇宙論と定常宇宙論の意見の食い違いは、大雑把に言えば宇宙空間という容れ物の違いと考える。

ビッグバン宇宙論は宇宙空間という容れ物が、現在は膨張していると考えられる宇宙論。定常宇宙論は宇宙という容れ物の大きさは未来永劫変わらないと考えられる宇宙論。

インフレーション理論と初期ゆらぎ

宇宙の構造はすべて初期ゆらぎに起源を持つので、これがどのように生成されたのかはたいへん興味のあるところである。現在のところ、これに対する確実な答えは存在しないが、インフレーション理論の枠組みの中で初期ゆらぎを生成する機構があり、現在有望な可能性として研究されている。インフレーション理論自体は宇宙論にとってさまざまな好ましい性質があるとはいえ、まだ確立した理論とはいえ、そもそもインフレーション自体が確実にあったと決まっているわけではない。もしあったとしても具体的にどのような場がインフレーションを起こしたのかはまったく確定していない。このため初期ゆらぎを一意的に予言できるわけではないが、多くのインフレーションモデルにおいては、生成されるゆらぎについて比較的普遍的な性質を予言する。インフレーション理論における初期の密度ゆらぎの生成の定性的な概略は § 5.3.3 で述べたが、インフレーション中におけるインフラトン場の量子ゆらぎが古典化することにより初期ゆらぎがつくられる。ここではこのゆらぎの生成機構についてさらに定量的な詳細を扱う。初期ゆらぎは宇宙の背景放射のゆらぎや、大規模構造などによって直接観測的に確かめることができる。したがって、インフレーション理論がどのような初期ゆらぎを生み出すのかを定量的に知ることは、より直接的な観測によってインフレーションモデルを確かめることにつながり、初期宇宙を実証的に知るためのたいへん重要な手段となる。

佐藤勝彦と加藤浩二の対話より抜粋

素粒子のような小さな宇宙がポット生まれた。 10^{-34} 秒。ビッグバン (火の玉) は 10 cm ほどの宇宙から始まった。

宇宙は初め「無」から生まれ、時間、空間、エネルギー、質量のない世界であった。これが物理学で考える「何もない」状態。

量子論（素粒子などミクロの世界で起こる出来事を扱う物理学） 無にも「ゆらぎ」がある。物理学の中では無の状態と言うことはなく、どんなにエネルギーを抜いても抜ききれず、必ず動きがある。即ち無にもゆらぎがある。初めの宇宙は絶えず物質が生まれたり消えたりする状態（ゆらぎ）が続き突然宇宙（物質・インフレーション現象）が生まれた。存在と非存在との間を揺れ動いている状態が物理学の「無」である。

無の状態から空間が生まれ、そこにエネルギーがたまっている = 10^{-34} cm の大きさの空間。それが倍々ゲームのように大きくなって行った。

相転移により真空のエネルギーが熱エネルギーに変換した。 10^{16} GeV の熱。

その後量子ゆらぎの凸凹が星や銀河になっていった。

物理学者は太陽系惑星は宇宙ではありきたりな存在であり、同じような惑星が無数にあるのでどこかに地球外生命が存在すると考えるが、生物学者は複雑な生物システムから人類が生まれるのは奇跡中の奇跡でこんな偶然はほとんど考えられないと言っている。

【注】 相転移：物質が気体や液体、固体になる相を気相、液相、固相と呼び、物質が気体から液体や固体へ、あるいはその逆などに相を変えることを相転移と呼ぶ。口語的には、相転移に伴う現象も含めて相転移と呼ぶことがある。相転移が起こると膨大なエネルギーが生まれる。

霊界物語に出てくる文学作品

霊界物語には仏典や日本の文学作品からの一文を引用している所があります。発見するのに仏典は比較的解りやすいのですが、日本の文学作品となるとなかなか私の知識ではむずかしいのですが、歌舞伎や謡曲などから引用されたものを幾つか発見しました。これ以外にもまだまだあると思います。

ここでは第12巻「深夜の琴」や第18巻「春野の旅」、第25巻の総説、第56巻「仇花」を取り上げてみました。

第十二巻 第十章「深夜の琴」に

初公『あの一絃琴の音はどうだ。小督の局こごうのつぼねが居るのぢやなからうかな。

「峰の嵐か松風か、恋しき人の琴の音ねか、駒を留とどめて聞くからに、爪音つまねしるき想夫憐きょうぶれん」と云つた奴だナア』

蚊取別『馬鹿云ふな。夫おれは何十万年未来の世の出来事だ。今は天の岩戸隠れの神代だぞ』

この場面は蚊取別の宣伝使が三光の宣伝使と初公を連れてエジプトのイホの都にある夏山彦の館での話で、真夜中に聞こえる一弦琴を聞いての会話です。

時は平氏全盛の平安朝最末期、時の帝であった高倉天皇は最愛の寵姫を亡くし悲嘆に暮れていた。見かねた中宮（清盛の娘である建礼門院徳子）は天皇を慰めようと、美貌と音楽の才能で名高かった中納言・藤原成範の娘を紹介する。宮中に上がった成範の娘は小督局と呼ばれ、天皇の寵愛を一身に受けた。しかし、中宮の父である平清盛は、天皇が中宮である娘を差し置いて小督に溺れる事に怒り狂い、小督を宮中から追い出してしまった。

小督は清盛を恐れて嵯峨に身を隠し、天皇とも音信不通となってしまう。天皇の嘆きは深く、密かに腹心の源仲国（宇多源氏・源仲章の兄）を呼び出して小督を秘密裏に宮中に呼び戻すよう勅を賜った。ちょうど仲秋の夜のこと、月が白々と照る中を嵯峨野に出かけた仲国は、小督が応えることを期待して得意の笛を吹いた。すると、見事な「想夫恋」の調べがかすかに聞こえてくるので、音のするほうに向かうと、果たして粗末な小屋に小督が隠れ住んでいた。

最初、小督は清盛を恐れて宮中に帰るのをしぶるが、「想夫恋」の曲で彼女の真意を悟っていた仲国に押し切れこっそりと天皇の元に帰ってきた。2人はひっそりと逢瀬を重ねるが、清盛におもねる者から秘密が漏れて、小督は無理やり出家させられてしまう。

『平家物語』巻六や『たまきはる』に登場するほか、能の「小督」はこのうち嵯峨野の場面に取材したもので、伝金春禅竹作の四番目物。現在も比較的盛んに上演される、美しくも哀切な名作である。

『亀山のあたり近く、松の一むらあるかたに、かすかに琴ぞ聞こえける。峰の嵐か、松風か、たづぬる人の琴の音か、おぼつかなくは思へども、駒をはやめて行くほどに、片折戸したるうちに、琴をぞひきすさまれける。しばしひかへて聞きければ、まがふべうもなき小督殿の爪音なり。「楽はなにぞ」と聞きければ、「夫を思ひて恋ふ」とよむ「想夫恋」といふ楽なり。』（平家物語）

また「峰の嵐か松風か、たづぬる人の琴の音か」の広まりは、この詞が黒田節の歌詞となっているこ

とからであろうか。福岡県の民謡で「酒は飲め飲め、飲むならば～」で始まる有名な曲「黒田節」で、一般に紹介されている歌詞「酒は飲め飲め」は一番で、二番が「峰の嵐か松風か 尋ねる人の琴の音か 駒をひかえて聞く程に（駒ひきとめて立ち寄れば） 爪つまもと普うしるき（たかき）想夫恋」となっている。
[以上インターネットより]

この小督局の話を知って「深夜の琴」を読むと滑稽な中にも、祝姫と蚊取別の間のそれぞれの想いを、何も知らずに読んだ時とは違った感じで読み取れるのではないのでしょうか。

第十八巻 第一章「春野の旅」には

千歳ひのきの老松杉けむかかへでぎふき 檜こはす 楓こはす 雑木も苔蒸して 神さび立のつぼる左右の密林 躑躅この花の此こ処こ彼こ処こ 白くれなゐに紅あざ 青黄色あざ 艶あざを争あふ其中あを 藪やぶ 鶯あまや山やま 雀すずめ 四十雀しじゅうがらガラ鳴き立つる 山路やまぢを越えて何時いづれしかに 小こ広ひろき田圃たんぼに流れ出る
古ふるき神代かみよの物語 唯一ただひとこと言も漏らさず 書かき伝つたへむと土筆つづつと 鉛筆とが尖らし道の辺に 待構まちかまへ居るしほらしさ 麦あわの青葉あざは止とめ葉はうち 筆ふでを隠して青々と 手具脛てぐすねひいて待つて居る
花はなは一面田おほの面おもてに 艶あざを競あふて咲あきぬれど 床とこには置おくな、矢張やはりの野ので見みよ紫雲英むらさきぐも 虎杖草いたんどうりの
ここかしこ 万年筆まんねんぴの芽こゝろを吹ふいて 書かき取りとり清書せいしよの準備じゆんび顔
此物語このものがたりの主人公しゆじんこう 四辺よへの景色けいせきも悦子えつこ姫ひめは 音彦ねひこ、加米彦かみひこ、夏彦なつひこを 吾子わがこの如ごとく労あはりつ
親おやになつたる気取りきどりにて お山おやまを見当みあたてに進すすみ行く。

千年を経た老松や杉、檜に櫻、楓などに混じって雑木に苔が生え、左右の密林の木々は神々しいまでに立っている。ツツジの花は白、紅青黄色とあちこちに咲き、艶を競っている中を、鶯ややまがら、四十雀が盛んに鳴ている。山道は何時しか少し開けた田圃道に出た。

古い神代の物語を一言も聞き漏らさずに書き留めようと土筆にた鉛筆の先を尖らせ、道端の土筆のようにしおらしく待ち構えている。麦の青葉は止め葉となって土筆を隠して青々として、（口述されるのを）手具脛ひいて待つて居る。

花は田圃一面に艶やかさを競って咲いているが、紫雲英や虎杖草は床に飾って鑑賞するものでなく自然のまま見るからよいのだ。

万年筆が芽を吹いて、口述で書き取ったものを清書しようと準備を整えている。

この物語（第18巻）の主人公である悦子姫は親になった様なつもりで音彦、加米彦、夏彦を吾が子のように労って、弥仙山を目当てに進んで行く。

此の場面は弥仙山へ向かう悦子姫、音彦、加米彦、夏彦の一行が休憩をしている所での情景を歌った宣伝歌である。鬱蒼と茂った密林を抜け少し広い田圃道に出た。花は艶を競うて咲き乱れ小鳥は歌っている。そして、物語口述の様子を鉛筆を土筆になぞらえて歌われている。

『床には置くな、矢張野で見よ紫雲英』この部分は江戸中期の播磨の俳人、滝野瓢水ひょうすいの句で、「手に取るな やはり野におけ 蓮華草れんげそう」を本歌とした表現であろう。一般にこの句の裏に、そのものにふさわしい環境に置くのがよいという意味が加味されているということです。ここでは奥にある意味を解釈せず素直に受けとってしまうと、よく言われることだが「霊界物語は余計な解釈をせず素直に読めばよい」となるが、物語の奥には深い深い意味が込められて居り、良く良く吟味しないと真意がつかめな

い。

【神さびる】こうごうしく見える。いかめしく厳肅である。古びる。

【藪鶯】藪にいる鶯。野山の鶯。 春

【山雀】（やまがら）日本各地の山林にすみ、昆虫などを食う。敏捷・伶俐で、籠鳥として愛玩、神社などでおみくじを引く鳥としても親しまれた。やまがらめ。 夏

【四十雀】日本の林地の鳥の代表。ユーラシア大陸に広く分布。 夏

【ガラ鳴き】ガラは鳥のカラは「悪い」、スは「鳥」から来ている。沖縄ではガラサーという。

【土筆】ツクシのこと。ツクシの古称で「つくづくしばな」とも。 春

【止め葉】イネの葉など最も上部に生える葉。それ以上は生えない箇所に出てくる葉。 夏？

【床には置くな、矢張野で見よ紫雲英】江戸中期の播磨の俳人、滝野瓢水の句「手に取るな やはり野におけ 蓮華草」が本歌か。①、野原で咲いているからこそレンゲソウは美しいのであって、摘んで観賞するものではない。そのものにふさわしい環境に置くのがよいというたとえ。②、遊女を身請しようとした友人を止めるために詠んだ句で、蓮華（遊女）は野に咲いている（自分のものではない）から美しいので、自分のものにしてはその美しさは失われてしまうという意味。転じて、ある人物を表舞台に立つべきではなかったと評する意味合いでも使われる

【虎杖】タデ科の多年草。いたる所に生え、根茎は長く這う。若芽はウドに似て、紅色・微紅の斑点がある。茎は中空で節があり、高さ1メートル余。葉は煙草の代用とした。雌雄異株。夏、淡紅色または白色の花穂をつける。若芽を食用とし、また、根は「虎杖根」として利尿・通経・健胃剤とする。古名は「たぢひ」「さいたづま」とも。 春。多遅は古名

第二五巻 総説では

梧桐一葉落ちて天下の秋を伝ふ。春風一陣水を過りて万波揺ぐ。成因成果悉く皆物の教とならぬはない。山野の樹草は風に吹かれて自然の舞踏を演じ、河水は独り音楽を奏し、鳥歌ひ蝶舞ひ花笑ふ至美至楽の天地、一として神の御声ならざるは無く、神の御姿ならざるはない。空に輝く日月も、星晨も、皆是神の表現、天地は吾々の大師であり經典である。善悪美醜一として神の御姿ならざるはない。あゝ三界の物語、述ぶる処は一切の神業のみである。瑞月が走らす口車も又神の一端の御用たる事を疑ひませぬ。

大正十一年七月十二日（旧閏五月十八日）

於竜宮館

「梧桐一葉落ちて天下の秋を伝ふ」の梧桐はアオギリです。この文句はおそらく坪内逍遙作の歌舞伎の演目『桐一葉』を踏まえての表現ではないでしょうか。 原因と結果

豊臣家の忠臣片桐且元（かつもと）が散りゆく桐の一葉を見て豊臣秀頼、延いては豊臣家の滅亡を感じる場面が想起されます。水面を吹きすぎる春の風が起こす波紋から、そこから起こる物事の事態を感じ取れるのです。

草木が風になびく様子も、せせらぎの音も鳥が歌い蝶が舞う様子はすべからく神のお声であり、また御姿です。空に輝く日月も空一面を覆う星も、森羅万象全てが神の表現であり、感じようによっては吾々の師であり教典です。そこに「芸術は宗教の母なり、芸術は宗教を生む」という聖師様のお言葉の神髓があるのでしょう。また、善悪美醜もまた天地の働きを構成する陰陽の表現であり、神の御姿なのです。

天然自然の姿を見て何を感じ何を思うか。物語を読んで何を感じ何を思うか。

霊界物語が表す現幽神三界の話は全てが神業であり、瑞月（出口聖師）の口述もまた神業の一端である事は疑いないのです。

「桐一葉落ちて天下の秋を知る」が逍遙の原作です。聖師は言葉を少し換えて、単に桐としないで本来の意味である梧桐としています。一般的な桐と梧桐は種類が違うようで、種子は古くは食用にされ、太平洋戦争中には炒ってコーヒーの代用品にしました。また、中国では鳳凰が住む樹とされています。アオギリの葉は大きな葉っぱで、豊臣家という大きな存在が落ちて時代の変換点を感じさせるものです。

また知るを「伝う」としています。神と人との関係では、人は霊界物語のように読んだり聞いたりしてその内容（教え）を知るのですが、一方神様から見れば我々に伝えられているのです。気付くと気付かぬとに関わらず多くのことを霊界物語は伝えようとしています。

先般の白馬村の地震では緊急地震速報があり数秒後に長い揺れを感じました。これは不思議な初めての体験でしたがほんの数秒前でも、何かが起こるということを知ることが出来ました。この渾沌とした時代を迎えて、どんな状況が起こるのか、想像を超える事態が訪れるのではないかと思います。そのとき知るでは遅すぎます。

神様はおそらく何んらかの手段を持って事前に「伝え（御内流）」て下さるのではないのでしょうか。

【成因】ものごとのできあがる原因。 【成果】なしえたよい結果。できばえ。

【大師】偉大なる師の意で、仏などの尊称。また、高德の僧の敬称。

第五六巻 第三章「仇花」から

さつき*待つ花 橘*の香を嗅げば 昔の人の袖の香ぞする

夢にも結ぶ恋しき吾背の君は如何なしつらむと、恋路も深き思ひ草*。

花いろいろのブラックリスト*1を経て咲き出づる卯の花*や、燕子花*、紫に染る山吹*の色香に愛でて唯一人トボトボと青野ヶ原を辿り行く。花は吾身の進み行く道の辺に笑へども、唯一声の訪れもせず、其足音さへも聞えず、百鳥は四辺の山林に啼き叫べども、吾涙未だ尽きず。実にも尽きざる恋の色、百花の種子、緑、紅、白、赤、黄、爛漫と咲き出づる恨は深し深百合*2や、神の恵の深見草*、心を寄せて進む身の、恋しき吾が夫は妾の心を白露の、梢に霜はおくととも、尙常磐なれや、橘*の目覚草*のいと清し、君の御身には何事も恙在せ玉ふ事は無くとも、何方に坐しますか、昔の恋を忍ぶ草*、春めき渡りて花霞、立上り行く空を見すてて行く雁は、花無き里に住みや習へるか、心空なる疑ひに満ちぬ。テルモン山の神苑に咲き誇りたる若芽の花を見捨ててはや一年、顧み玉はぬ夫の情無さ。仮令此身は屍を野辺に晒すとも、思ひつめたる恋の意地、足乳根の父母の許さぬ恋に焦れし身は、款冬*（山吹）誤つて晩春の風に綻び、躑躅*は夜遊の人の折を得て、驚く春の夢の中、胡蝶の戯れ色香に愛でも、今となり思ひ廻せば心の仇花なりしか。今や吾が身は夏草の、湿茸*に交る姫百合*の、手折る人なき身の浅間しさ。アア恋しき鎌彦の君は、何れにましますか、唯一目会はまほしやと、吹来る風の響にも、とつおひつ心を悩ませ乍ら、北へ北へと進み行く。・・・・・・

この章の冒頭の文章は無学な私には大変難解です。恋しき夫釜彦に別れて一年、夫を訪ねてさ迷うケリナ姫はベルと争ってエルシナ川に落ち冥途の八衢に行きます。

「さつき待つ花橘の香を嗅げば 昔の人の袖の香ぞする」この歌は詠み人しらず 古今和歌集 夏の歌 (139)です。これを踏まえた伊勢物語 (六十段) の有名な話があります。その大略は。

昔、ある男がいて宮勤めが忙しく、妻に愛情をかけることが少なかった。そうしたところ妻は男と別れて、ほかの男とよその国へ行ってしまった。その後男は出世し勅使として宇佐神宮へ使いに出た。その時、接待役人の妻に自分の元妻がおさまっていることを知った。宴会の席で男は「接待係の妻の酌でないと酒は飲まない」とごり押しした。そこで接待係は仕方なく妻に酌をさせた。男は、膳に出されたミカンを手にとって『五月待つ…』と歌を詠んだ。このとき、酌をする女は袖の香りを嗅いで、そっと目を上げると、そこにはまぎれもない昔の夫がいた！ 元夫に気がついた元妻は尼になり、山に入って残りの人生を過ごした。というものです。

しかし、ここでは失踪した夫鎌彦を慕うケリナ姫の素直な気持ちなのでしょう。

*次の文も古今集からです。

『花霞、^{たちのぼ}立上り行く空を見捨てて行く雁は、花無き里に住みや習へるか』は本歌：春がすみ立つを見捨てて行く雁は 花なき里に住みやならへる (古今集・春上、新撰和歌・春秋) を踏まえての表現でしょう。歌の意味：春霞が立つ良い季節を見捨てて北へ帰ってゆく雁は、花のない里に住み慣れているのか、という歌 です。"見捨てて" という言葉に意味があり、春霞が立つのは花の咲く前ぶれ、それを知らずに去って行く雁は、ということでしょう。自分を見捨てて顧みない夫に対するへケリナ姫の思慕の気持ちが表れています。

さらに謡曲「^{ひばり}雲雀山 (謡曲四番目物。中将姫は継母の^{ざんげん}讒言により、父の^{よこはぎ}横佩右大臣豊成に殺されかけますが、乳母たちが雲雀山にかくまい花を売って養う。ある日、狩りに出た豊成が娘の生存を知って前非を悔い奈良の都に連れ帰る)」を踏まえての文章も出てきます。

『^{くわんちゆう}款冬 (山吹) ^{あやま}誤つて晩春の風に^{ほころ}び、^{つっじ}躑躅は夜遊の人の^{をり}折を得て、驚く春の夢の中、^{こてん}胡蝶の^{なはむ}戯れ色香に愛でしも、今となり思ひ^{まは}廻せば心の仇花なりしか。』

款冬には冬の字がついているので冬咲きそうなものであるが、間違っ
て晩春に咲くつつじの花は真っ赤で火に似ているから、夜遊ぶ人はこれを灯
火と間違えて折って驚く春の夢の中・・・

この一文は謡曲「雲雀山」に出てくる一節であり、その元となったのが
和漢朗詠集にある、二つの詩歌です。参考までに下に載せてみます。

*謡曲 雲雀山より

地 上歌「花なき里に住みや習へると。心そらなる。疑いかな。

シテサシ「款冬あやまつて暮春の風に綻び。

地 上歌「又躑躅は夜遊の人の折をえて。驚く春の夢のうち。

胡蝶の遊び色香にめでしも皆これ心の花ならずや。

シテ下歌「実に面白き遊花の友。

地 下歌「春の心や。惜しむらん。

140雌黄を点着して天に意あり 款冬誤りて暮春の風に綻ぶ、
点着雌黄天有意。款冬誤綻暮春風。 藤原実頼



138夜遊の人は尋ね来りて把らんと欲す 寒食の家にはまさに折り得て驚くべし、
夜遊人欲尋来把。寒食家応折得驚。山石榴艶似火 源順

『今や吾が身は夏草の、湿茸に交る姫百合の、手折る人なき身の浅間しさ』
湿茸はキノコの湿地（占地）ではなく、夏の異称の「しめじ」で。初夏に咲く姫百合に掛かるのであろう。
全体を通してケリナ姫の切ない気持が、切々と歌われています。また、物語には様々な文学的表現が出てきます。ここでも様々な草花が鏤められており聖師の幅広い知識は私には大変勉強になりました。

【花いろいろのブラックリスト】 不明。ブラックリストは危険者名簿であるから、誤植ではないだろうか。

【燕子花、紫に染る山吹の】 ここは紫に染るが燕子花の前に来て「紫に染る燕子花、山吹の色香に愛でて」となるのでは。

【百花】牡丹 【白露の、梢に霜はおくととも】 白露は「置く（紀く、奥）」、「け（消）」、「たま」にかかる枕詞

【ととも】 と言っても。としても

【なれや】 …だからだろうか。…だろうか、そんなことはない。…であるよ。

【足乳根の】 「母」「親」にかかる枕詞 【深百合】 単なる百合か

《参 考》

〔第十八卷〕

「床には置くな、矢張野で見よ紫雲英」の裏の意味を〔ここでは奥にある意味を解釈せず素直に受けとってしまうと、よく言われることだが「霊界物語は余計な解釈をせず素直に読めばよい」となるが、物語の奥には深い深い意味が込められて居り、よくよく吟味しないと真意がつかめない。〕とするのに対し、

山口本苑の藤井さんは以下のように言う。 「霊界物語もまたまたそこで語られる内容に相応しい環境や背景があるに違いない。そうした背景がわかればより霊界物語に込められた深い意味がわかるのではないだろうか」

〔 第二五卷 〕

「梧桐一葉云々」は愛善世界社版第25巻の注釈で、前漢の書物『淮南子』によると書いてありますが、原典は、

見一葉落 而知歳之將暮 睹瓶中之冰 而知天下之寒 以近論遠
（『淮南子』（紀元前2世紀）、「卷十六 説山訓」）

とあるのみで、「梧桐」の語は見あたりません。

南宋の呉自牧の著した『夢梁録』に、梧桐の入った形が見えます。

梧桐一葉落 天下尽知秋 （『夢梁録』（13世紀）巻四）

さらに17世紀の明代、王象晋による『群芳譜』（植物図鑑）には次のようにあります。

梧桐一葉落 天下尽知秋 梧桐一葉生 天下新春再

一方、日本の文献では安土桃山時代の『連歌至宝抄』にあります。

いつれの木も葉の落るは初秋に候。梧桐一葉知天下秋と作候間、梧桐の事なりと申慣し候

梧桐と桐は全く別の植物ですから、日本で桐一葉として定着した（16世紀末？）のは誤用のようです。さらにこれを有名にしたのが逍遙で、第25巻の表現が原点に忠実といえるのではないかと思います。以上愛善荘の長谷川さんより補孝をいただきました。

第19巻第6章「和合と謝罪」には

「一葉落ちて天下の秋を知るとかや。神の教も不相応ぬフサの国、北山村の本山ウラナイ教の頭株、心も驕る高姫が、執着心の胸の闇、鼻高山彦や黒姫は、奥の一間に差し籠もり、ウラナイ教の前途に就いて、コソコソ協議を凝らし居る。」

第10章「馬鹿正直」では、

竜若が「ウラナイ教のこの館も、一葉落ちて天下の秋を知る処か、全部落ちて寂寥極まる天下の冬となって来たじゃないか。」があり、聖師は両方を使っておられる。

桐一葉は坪内逍遙作の歌舞伎の演目で1894年（明治27年）11月から1895年（明治28年）9月にかけて『早稲田文学』に連載。1904年（明治37年）3月東京座初演。6幕16場。

関ヶ原の戦い後の大坂が舞台で、豊臣家の忠臣片桐且元の苦渋を描く。

豊臣家を滅ぼそうとする徳川家康は、方広寺の鐘銘にあった些細な文字の不備に難癖を付け、これを理由に大坂に最後通牒を突きつける。すなわち、豊臣秀頼を大和郡山に国替の上、今後は江戸に毎年参勤とする、さらに高台院を人質として江戸に下向させることを条件とし、これを容れなければ大坂を攻め滅ぼすというのだ。豊臣家の人々は憤慨する。且元は徳川と豊臣との間に挟まれ苦慮する。

第56巻「仇花」の現代語訳 【赤字（ゴシック体）は意味不明部分】

五月を待つようにして咲く橘の花の香りをかげば、昔馴染んだ人の袖の香りがするよ。

夢にまで見る恋しい夫はどうして居られるのでしょうか、深い恋路に思い悩んでいます。

花いろいろの**ブラックリスト**（不明）を経て咲く卯の花〔空木（白）〕や紫に染まった燕子花（紫）、山吹（黄）などの色と薫りを楽しみながら一人トボトボとみどりの原野を探し求めて行く。花は自分の行く道にほほえんでくれるけれど、一言も語ってくれないし、足音も聞こえない。多くの鳥はあたりの山林に啼くが、私の悲しみの涙はいまも尽きない。こうした尽きない恋心は、牡丹の種子から、緑、**紅**、白、赤、黄、**爛漫**と咲いているが、**恨**の深い百合や、神の恵も深い牡丹に、心を寄せて進む身の、恋しい吾が夫は立秋の前に梢に霜を置くような淋しい思いをさせるとも、なお永遠であるよ、目を覚まさせる橘はたいそう清く、貴方の御身の上に何事も無く、どちらにお出でになるのでしょうか、昔の恋を偲んで（ノキシノブ）います、春らしくなって春霞が立つ良い季節を見捨てて北へ帰ってゆく雁は、花のない里に住み慣れているのかと、心虚しい気持に満ちてしまいます。テルモン山の神苑に咲き匂う若芽

(新妻)の花を見捨て行かれてからはや一年が経ち、私のことを思い出そうともしない夫の情無さ。たとえ此身は屍^{しかばね}を野辺^{きら}に晒すとも、思いつめた恋の意地、父母の許さぬ恋に焦れた身は、款冬には冬の字がついているので冬咲きそうなものであるが、間違っ^{あやま}って晩春に咲き、つつじの花は真っ赤で火に似ているから夜遊ぶ人はこれを灯火と間違えて折って驚く春の夢の中で、今とな^{こころ}って思い廻せば心の仇花だろうか。

今や吾身は夏草の中に咲く姫百合のように、手折^{たえ}ってくれる人のない浅間しい身です。アア恋しい鎌彦の君は何処にお出でですか、唯一目会いたいと、吹いて来る風の音にも、あれこれと心を悩ませながら、北へ北へと進んで行く……………。

◆「仇花」に出てくる草花を表にまとめると (*印の付いた花木)

花名	意味と古称	花の季節・色
さつき (皐月)	サツキツツジの略。ツツジに同じ	春から夏 赤、紅、白
花橘	花の咲いている橘。香の一種	5から6月 白
思草。	(物思いするように見える草というところから) ナンバンギセルの古名。リンドウ・ツユクサ・オミナエシなどの古名ともいう。タバコの異称	季節：秋
卯の花	空木 (うつぎ) の別称	白色 (ピンク、赤) 初夏
燕子花	湿地に群生。漢字表記の一つ「杜若」は、本来はヤブミョウガという別種の漢名 (「とじゃく」と読む) であったが、カキツバタと混同されたものである	花：紫色 初夏に咲く
山吹	晩春に明るい黄色の花を多数つける	黄色
深見草	牡丹の別称	
橘	食用柑橘類の総称。ときじくのかくのこのみ。ニホンタチバナの別称 秋。カラタチバナの別称	花は5～6月。実は秋
目覚草 (めざましぐさ)	「目をさませるもの」煙草 (タバコ) また、茶。マツの異名。荻の異称。	
忍ぶ草	シダ類の一種。のきしのぶ。古い木の幹や岩石の表面、古い家の軒端などに生える。②「忘れ草」の別名。③思い出のよすが。▽「偲 (しの) ぶ種 (ぐさ)」の意をかけたいう。	[季語] 秋。
款冬	落、山吹、つわぶき、何れも款冬とも書く	
躑躅	常緑または落葉低木の通称。山地に多く自生、また観賞用として栽培。小枝を多く分岐し、枝・葉には細毛がある。大形の合弁花を単立または散形花序に開く。	春から夏にかけ、赤・白・紫・橙色などの
湿茸、湿地・占地	俗に「におい松茸、味しめじ」といわれるキノコであるが「しめじ」は夏の異称	
姫百合	高さ60センチメートル。、1個または数個の小形の六弁花を真上に向けて開く	初夏 オレンジ

* 1 「ブラックリスト」について

ブラックリストという言葉は霊界物語全体で何ヶ所か出て来ます。

* 第二七卷 第五章 玉調べ

高姫『お前さまの言ふ事は、チツトより信用が出来ぬ。ブラックリストに登録されて居る注意人物だ。お黙りなさい』

国依別『高姫署のブラックリストに記されて居る私でも、チツト位信用が出来るのですか。私は又大いに信用が出来ぬと仰有ると思つたに……それはさうとして次の白色の玉を早く調べて見せて下さい』

* 第五六卷 第三章 仇 花

夢にも結ぶ恋しき吾背の君は如何なしつらむと、恋路も深き思ひ草。

花いろいろのブラックリストを経て咲き出づる卵の花や、燕子花、紫に染る山吹の色香に愛でて唯一人トボトボと青野ヶ原を辿り行く。……

* 第六九卷 第六章 背水会

『ハイ、親分は奥にをられますが、めつたに博奕は打つてをりやせぬから、どうぞ帰つて下つせい』
取締『イヤ、博奕は今打つてゐなくても、拘引しようと思へば何時でも拘引できるのだ。新刑法によつて賭博常習犯人とブラックリストについてゐるのだから、非現行犯で引張つてやらうかな』

* 第七〇卷 第一六章 天降里梅

『そら、さうですとも、普通の人間なら、互ひに仲ようして、お交際をしてもらはなくちやなりませぬが、あのレールさま、ま一人のマークさまの二人は、ラマ本山のブラックリストとかいふものについてゐる人物で、いつも番僧さまが如意棒をブラ下げて調べに来るぢやないか。あの人には向上会員とか、黒い主義者とかいふぢやないか。そんな人と交際でもしようものなら、番僧さまにつけねらはれ、誰もいやがつて日傭者にも雇うてくれませぬワ。……』

* 第八一巻 第一〇章 復古運動

マークは歌ふ。……世の人にブラックリストとけなされて 悲憤の涙に幾日嘆きぬ』

以上から「仇花」に出てくる「ブラックリスト」以外は、一般的に言う悪人のリストという意味で統一されています。「仇花」のブラックリストの意味だけ理解しがたいもので、もしかしたら誤植か？あるいは、ここには様々な花が登場するし、花の色も見られる。そこでフラワーリストかカラーリストではないだろうか。別表に示すように様々な花が出てくるので、仮にリストが花の種類や色を指すとすれば、以下のようになるか。 訳：①いろいろの花のリストを辿るように咲き出る ②いろいろの花のカラーリストを辿る
ように咲いている。

* 2 「恨は深し深百合や」について

この深百合は辞書には載っていない語です。もし韻を踏んでいるとも考えられますが、インターネットより

万葉集第十一卷：道の辺の草深百合の後もと言ふ（原文：路邊 草深百合之 後云 妹命 我知）

作者：柿本人麻呂歌集より

よみ：道の^{うらみ}辺の、草深百合の、^{あかひゆり}後もと言ふ、妹が命を、我れ知らめやも

意味：道端の百合のように、後も、というあのひとの命を私が知らないなんてことはありません。

「ゆり」というのは、「後(のち)、将来」という意味です

道の辺の 草深百合の 花笑みに 笑みしがからに 妻と言ふべしや (道邊之 草深由利乃 花咲尔 咲之柄二 妻常可云也)

道のほとりの繁みに咲く百合の花が ほころびるようにちょっと微笑みかけたからといって 妻などとなれなれしくしないでくださいな

* 「花笑みに」は「蕾がほころびるように」

* 「や」終止形に付き、質問・疑問をあらわす。相手に対し呼びかけ、問いかける気持を伴うことが多い。

以上から深百合を単に百合と解釈している。

《その他の例》

第二五卷 第二章 「与太理縮」から

左守の清彦は宇豆姫を妻にしようとして、黄竜姫の昔の夫である友彦が攻めてくるとの噂を流す。……

黄竜姫『ア、情ない母様の御精神、如何したら本当の改心をして下さるであらう。……何卒神様、一時も早く真の道が、私の一人よりない大切な母に解ります様に、何卒心の鏡に光明を与へ、心の暗黒を照らして下さいませ。

あゝ惟神靈幸倍坐世』と合掌し涙含む。

蜈蚣姫『何程人間が改心したと言つても、元から悪の素質を持つて居る吾々の身魂、譬へて言へば、大きな鉢の中へ泥水を盛り、それが時節の力で泥は鉢の底に沈り、表面は清水に澄み渡つて居つても、何か一つ揺ぶるものがあると、折角底に沈つて居た泥が又もや浮き上り、元の泥水となるのは自然の道理だ。之が惟神のお道です。体を以て体に対し、霊を以て霊に対し、力を以て力に対するは天地の道理ぢやありませぬか。アインシュタインの相対性原理の説明だつて、さうぢやないか。お前さまの様な其んな時代遅れの事を言つて居ると、蟹の手足をもぎ取り、鳥の翼を剥ぎ取つた様な目に遭はされませぬぞ。三千世界に子を思はぬ親があらませうか。お前が可愛いばつかりに、妾はお気に召さぬ事を言ふのだが、親の意見と茄子の花は、千に一つも仇花はありませぬぞ。良薬口に苦し、甘いものは蝸虫の源、何卒母が一生の願ひだから、出陣を見合す事は思ひ止まつて下さい。妾も之から清公の左守神を引率れ、年寄の花を咲かし、冥途の土産に一戦やつて見よう程に、必ず必ず柔弱な精神を發揮して、折角張り詰めた母の勇猛心を挫いて下さるな。親が子に手を合して頼みます。海往かば水漬く屍、山往かば草生す屍、大神の辺にこそ死なぬ、閑には死なじ顧はせじと*、弥進みに進み、弥逼りに逼り、友彦が軍勢を山の尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に雑散らして服へ和し、一泡吹かして懲らしめ呉れむは案の中、必ず邪魔召さるな』……(友彦が軍勢を引き連れ攻めてくると言うことが間違いであることが判る) 鶴公『お言葉の通り実に寒心致しました。然し乍ら之全く神様の吾々に対するお気付けでせう。之に鑑み今後は、人の言ふ事を軽々しく聞きしてはなりませんまい』

ここにでてくる、「海往かば水漬く屍、……(傍線部分)」は大伴家持作の長歌から採られている。

明治13年（1880年）に当時の宮内省伶人だった東儀季芳も作曲しており、軍艦行進曲の中間部に今も聞くことができるが、何と云っても有名にしたのは、信時潔がNHKの囑託を受けて作曲してからである。信時の自筆譜では「海ゆかば」である。出征兵士を送る歌として愛好された。昭和12年11月22日に国民歌謡で初放送。本来は、国民の戦闘意欲高揚を意図して制定された曲だった。本曲への国民一般の印象を決定したのは、太平洋戦争期、ラジオ放送の戦果発表（大本営発表）が玉砕を伝える際に、必ず冒頭曲として流されたことである

家持の長歌を現代語に訳すと（ウイキペディアより）

葦の生い茂る稔り豊かなこの国土を、天より降って統治された 天照大神からの神様たる天皇の祖先が 代々日の神の後継ぎとして 治めて来られた 御代御代、隅々まで支配なされる 四方の国々においては 山も川も大きく豊かであるので 貢ぎ物の宝は 数えきれず言い尽くすこともできない そうではあるが 今上天皇（大王）が、人びとに呼びかけになられ、善いご事業（大仏の建立）を始められ、「黄金が十分にあれば良いが」と思し召され 御心を悩ましておられた折、東の国の、陸奥の小田という所の山に 黄金があると奏上があったので 御心のお曇りもお晴れになり 天地の神々もこぞって良しとされ 皇祖神の御霊もお助け下さり 遠い神代にあったと同じことを 朕の御代にも顕して下さったのであるから 我が治国は栄えるであろうと 神の御心のままに思し召されて 多くの臣下の者らは付き従わせるがままに また老人も女子供もそれぞれの願いが満ち足りるように 物をお恵みになられ 位をお上げになったので これはまた何とも尊いことであると拝し いよいよ益々晴れやかな思いに満たされる 我ら大伴氏は 遠い祖先の神 その名は 大久米主という 誉れを身に仕えしてきた役柄 「海を行けば、水に漬かった屍となり、山を行けば、草の生す屍となって、大君のお足元にこそ死のう。後ろを振り返ることはしない」と誓って、ますらおの汚れないその名を、遙かな過去より今現在にまで伝えて来た、そのような祖先の末裔であるぞ。大伴と佐伯の氏は、祖先の立てた誓い、子孫は祖先の名を絶やさず、大君にお仕えするものである と言い継いできた 誓言を持つ職掌の氏族であるぞ 梓弓を手に掲げ持ち、剣太刀を腰に佩いて、朝の守りにも夕の守りにも、大君の御門の守りには、我らをおいて他に人は無いと さらに誓いも新たに 心はますます奮い立つ 大君の 栄えある詔を拝聴すれば たいそう尊くありがたい

◇瑞能神歌（大正6年）にも、

〇おちこちの寺の金仏、金道具、釣鐘までも鑄潰して、御国を守る海陸の、軍の備えに宛つる世は、今眼のあたり迫り来て、多具理に成ります金山の、彦の命の御代と化り、下国民の持物も、金気のは金火鉢、西洋釘の折れまでも、御国を守る物の具と、造り代えても足らぬまで、迫り来るこそ歎てけれ。〇くに挙り上は五十路の老人より、下は三五の若者が、男、女の別ち無く、坊主も耶蘇も囚人も、戦争の庭に立つ時の、巡りくるまの遠からず、遠津御神の造らし、御国を守る兵ものと、日本心を振起し、伊都の雄猛び踏み健び、敵のころびを起しつ、海往かば水潜しかばね山往かば、草生す屍大君の、御為に死なむ徒らに、閑には死なじ一足も、顧みせじと弥進み、いや迫りつ、ム山の尾に、追伏せ散らし川の瀬に、追払ひつ、仇軍、服従え和して浦安の、御国を守れ秋津人、現津御神と大八洲、国知食す天皇の、高き恵みに酬えかし、日本島根の神の御子。